

白石町民俗文化財調査報告書第1集

すこ
須古の花ごぎ

平成12年3月

佐賀県白石町教育委員会

白石町民俗文化財調査報告書第1集

す と 須古の花ごぎ



(佐賀県白石町の位置図)

平成12年3月

佐賀県白石町教育委員会



仏さんの前（全体）



仏さんの前（部分）



座りござ（一枚もん）（部分）

序

白石町川津地区に伝えられる「花ござ」は、その肌ざわりのよさ、紋様の美しさからつとに有名であります。その起源は不明であります。明治以降戦後の一時期まで、白石町を代表する特産物の一つでもありました。

しかしながら、戦後の高度経済成長に伴う家庭様式の変化等により、昔ながらの花ござの需要も減少してきました。現在では僅かにお二人のみが織り続けられている状況となりました。

白石町としては、この花ござを貴重な民俗文化財として後世に伝えていきたいと考えていましたが、後継者不足により非常に困難な状況になってきていることは否定しようがありません。

ここに、記録保存として花ござの調査結果をまとめましたが、長い伝統に培われた花ござの一端を少しでもご理解していただければ、幸甚に存じます。

平成12年3月

佐賀県白石町教育委員会

教育長 渕 上 徳 秋

例 言

1. 本書は白石町川津地区に伝わる「花ござ」の記録保存調査報告書である。
2. 調査は「花ござ」の織り手である栗山ユキさんからの聞き取り調査を主とし、必要に応じてビデオ撮影を行った。
3. 調査は白石町文化財保護審議会（会長太田心海）と白石町教育委員会生涯学習課渡部俊哉が行い、写真・ビデオ撮影は渡部が行った。
4. 本書の執筆・編集は渡部が行った。

凡 例

1. 本書で記述する長さは基本的にメートル法を使用した。が、史料から引用する場合や一部必要に応じて尺貫法でも記述した。
2. 史料・資料からの引用・紹介についてはできるだけ原文のままとしたが、便宜上句読点を付け、一部常用漢字に直した所もある。また、判読不明な文字については□で表した。
3. むしろ（蓆）の表記については席・蓆・蓆・筵などがあるが、史料や文献から引用する場合はそれぞれの原典に記されている表記を用い、それ以外では基本的に「蓆」を使用している。また、ござ（蓆・蓆）の表記も、「むしろ」の場合と同様とし、「花ござ」やその種類を表わす場合以外は基本的に「蓆」を使用している。

本文目次

I. 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
II. 花ござ製作工程及び道具類	2
1. 泥染め	2
2. 染色	2
3. 織り	3
4. 仕上げ	4
5. 織機について	4
III. 藺草製品、主に花蓆について	6
1. 古代の藺草製品について	6
2. 須古における藺草栽培の開始	10
3. 江戸時代の肥前国の藺草製品	11
4. 明治前期の藺草製品（莞蓆）	15
5. 明治後期・大正・昭和初期の莫蓆・花蓆	16
6. 須古村莞蓆製造組合の解散	26
7. 藺草栽培の現況	27
IV. ま と め	29

資料目次

資料1 『御勝手方日記』文化八年（1811）未閏二月付願書	12
資料2 『御勝手方日記』文化八年（1811）未閏二月付願書	12
資料3 『御勝手方日記』文化八年（1811）未五月朔日付書	13

表目次

表1 花ござ種別一覧	5
表2 諸国貢進の蓆・薦等一覧	8
表3 明治時代末期の花蓆輸出高港別一覧	17
表4 県内莫蓆及び莞蓆製造戸数一覧	18
表5 県内莫蓆及び輸出向け莞蓆生産一覧	20
表6 県内莫蓆及び輸出向け莞蓆輸出入一覧	24
表7 全国普通花蓆生産額一覧	25
表8 杵島郡内莞蓆価格一覧	26
表9 杵島郡内莫蓆及び莞蓆（花蓆）価格一覧	26

図 版 目 次

- PL.1 1. 栗山ユキさん 2. 仏さんの前 3. 座りござ (一枚もん)
4. 座りござ (二枚もん) 5. 座りござ (一間もん) 6. 寝ござ (クゴモン)
7. 赤ちゃんござ
- PL.2 1. 染色状況 2. 染め用のカンカン表 3. 染色した藺草の乾燥(1)
4. 染色した藺草の乾燥(2) 5. 織機前面 6. 織機後面
7. 織機右側面 8. 織機後面の墨書銘
- PL.3 1. ワク (糸車) 側面 2. ワク刻印 3. ワク (以前使用) 側面
4. ワク (以前使用) 刻印 5. ワクと支える台 6. 寝ござのハエ方
7. 鉄棒 (寝ござのハエ方)
- PL.4 1. コテ (以前使用) 表 2. コテ (以前使用) 裏 3. 織機の小孔 (左側)
4. 八角形横棒 (右側) 5. コテノセ (長) 6. コテノセ (短)
7. ヤ (矢か) 8. タンチョウ (木槌)
- PL.5 1. イサシ (藺指) 2. ござ織り状況 3. 足踏み部
4. コテを前後させる部位 5. ござの尺 6. 藺草の折込み状況
7. ござひっこみ作業 8. ござひっこみ用道具
- PL.6 1. 『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』表紙
2. 『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』未閏二月付願書 (資料1)
3. 『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』未閏二月付願書 (資料2)
4. 『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』未五月朔日付書 (資料3)
- PL.7 1. 『明治十年内國博覧會自費出品目録』表紙
2. 『明治十年内國博覧會自費出品目録』蓆 (花蓆)
3. 『明治十年第一回内國博覧會出品目録并解説書褒状寫』表紙
4. 『明治十年第一回内國博覧會出品目録并解説書褒状寫』「出品目録」蓆
5. 『明治十年第一回内國博覧會出品目録并解説書褒状寫』「出品解説書」莞蓆
- PL.8 1. 『明治十四年第二回内國博覧會出品願并出品解説書』表紙
2. 『明治十四年第二回内國博覧會出品願并出品解説書』蓆
3. 『明治十四年第二回内國博覧會出品目録并褒状寫』表紙
4. 『明治十四年第二回内國博覧會出品目録并褒状寫』蓆

I. 序 説

1. 調査に至る経緯

白石町川津地区の花ごぎは「須古の花ごぎ」として古くから知られ^①、伝統工芸品として平成9年に開催された世界焔の博有田会場で実演も行われている。

大正元年（1912）に須古村莞蕙製造組合が結成され、県外はもとより国外にも輸出されるほどの盛況を呈したが、高度経済成長に伴う住宅環境、生活様式の変化に伴い、戦後に組合も解散され、畳表の製造は続けられているものの、花ごぎを織る人は年々減少している状況である。

過去に「須古の花ごぎ」を紹介・調査した例はあるものの、基本的な項目である花ごぎの起源や組合の組織機構・生産数量などを調査した例は未だ聞かない。

今や、川津地区で二人だけになってしまった花ごぎの織り手は、いずれもその技術を自身の娘や孫達には伝えておらず、その製作も趣味として続けられている。一時期は、白石町としても花ごぎを伝統工芸品、産業の一環として振興しようとしたこともあったようであるが、残念ながらその目的は上記の理由により達成されていない。

今や貴重な「須古の花ごぎ」を、民俗文化財として記録保存を図る必要を認め、聞き取り調査並びにビデオにより記録を行い、併せて藺草栽培や肥前国（佐賀）の藺草製品（主に花蕙）の歴史、須古村莞蕙製造組合に関する調査を行ったのが本書である。

調査にご協力をいただいた個人と団体は以下のとおりである（敬称略・五十音順）。記して感謝の意を表します。

赤坂吉磨・家田淳一・尾形善郎・尾崎葉子・香月茂・栗山ユキ・栗山勝次・
高岸範道・竹下忠義・田平進・久富桃太郎・樋渡拓也・溝上秀樹・山崎和文
有田町歴史民俗資料館・大賀株式会社・北方町教育委員会・県立九州陶磁文化館・
県立図書館郷土資料室・県立博物館・県文化財課・JA 白石営農相談課・
多久市郷土資料館・陽興寺

<註>

- ①『白石町 町勢要覧』白石町役場 1963年（「川津 北川義夫方製 花ゴザ」の白黒写真掲載）
『白石町史』788～790項 白石町史編纂委員会 1974年
『心豊かな明るい町 しろいし』白石町役場 1976年（カラー写真、説明文）
「ひと訪問記－花蕙のふるさと－」『新郷土』昭和51年8月号 佐賀県文化館
「2. 農業 (2) 農業生産の動向 (ウ) イグサ」『白石町農業の概要』佐賀県杵島郡白石町 1983年
「イグサ」項『佐賀県大百科事典』佐賀新聞社 1983年
稲佐英明「53 ごぎ作り」『佐賀県の諸職』佐賀県教育委員会 1991年
「伝統の須古ごぎを虹色に織る」『江戸時代 人づくり風土記』41佐賀のしおり
社団法人農村漁村文化協会 1995年
ごんどうちあき「虹いろの須古ごぎを織る 栗山ユキさん」『童話と童詩の本 ブランコ』第10号
佐賀童話の仲間の会「ブランコ」1998年

II. 花ごぎ製作工程及び道具類

花ごぎの製作工程やその際に使用する道具類の聞き取り調査等は、白石町川津在住の栗山ユキさんから話を伺ったものである。

栗山ユキさん（PL.1-1）は、明治40年（1907）1月3日に須古村（現、白石町）川津に生まれる。22歳で結婚、三男四女をもうけた。5・6歳頃からお母さんがごぎをうつを見ておられたが、小学校3年生の夏にお母さんを亡くされ、先代の祖母からごぎ織りの技術を習得、花ごぎは15歳くらいから織り始めたという。

今も夏の時期を中心に花ごぎを織り続けられているが、商売としてではなく、依頼されたりした場合やご自身の趣味として織られている。花ごぎの技術は娘さん達には教えておらず、現在（平成11年度）花ごぎを織ることのできる人は、栗山ユキさんの他には、同じく川津在住の吉岡エイさん（大正6年10月13日生）一人だけになってしまった。^①

一般的には「花ごぎ」と呼ばれているが、栗山さんご自身は「花ごぎ」とは言わない。それは後述するように各種の種類があるためで、「花ごぎを」と注文されてもどれか分からないので、必ず種別名を聞かれるそうである。

1. 泥染め

刈り取った藺草を泥染めするようになったのは、畳表を機械織りするようになってからである。栗山さん宅に自動織機が導入されたのが終戦後の昭和20年代であるから、それ以降のことである。当時は全長約1.5cm、深さ約50cmの木製舟形容器や「カンカン」に泥（染土）と水を混ぜ、よく乾燥させた藺草を浸け足で踏み込んでいたが、現在は機械で行っている。浸けておく時間は2～3分程度、泥染めした後に機械で乾燥させる。使用している泥（染土）は、兵庫県淡路島の産出で、熊本県で加工されたものである。

泥染めをする効果としては、乾燥を促進する、色つやを良くし退色を防ぐ、貯蔵中の水分を調整し変色を防ぐ、藺草独特の香りをつけるなどが挙げられる。

2. 染色（PL.2-1～4）

使用している色は紫・赤・青・黄味茶（きんちゃ）・海老茶で、以前は黒も使用していたが、現在はほとんど使用していない。これらの色は大川市から購入した化学染料を使用して藺草に染色する。使用する道具はブリキ製の「染め用のカンカン」（PL.2-2）と呼ばれるもので、全長120cm、幅42cm、深さ25cm、上部に木製の把手が付いている。

染め方はまず「染め用のカンカン」に水を入れ直接下から火をたき、沸騰したら染料（染め粉）を入れ事前に水付けした藺草を10～15分程度浸ける。染料の濃度や時間は栗山さんの長年の勘に依るところが多いようである。また、染色しない藺草を1週間程天日で乾燥させると、緑色から白色に変色する。両端を白色化することにより、1本の藺草で2色の効果が出る。

染め上がった藺草は色別に束ね、横木に掛けたりして天日で2～3日間乾燥させる（PL.2-3・4）。

現在使用している色は上記のように主に五色であるが、大正元年（1912）の組合結成以前は、後述するように赤と黒の二色のみで植物染料を使用していた。主に各家で染めていたが、組合結成以後は各種の色で染めるようになり、組合の専門の染手が染色したり、或いは各家で染めていた。また、白石町主催の染色講習会に参加したり、柳川方面に染色やござ織り方の見学にも参加したことがある。植物染料では叩いた藺草でなければ染色できないが、化学染料では藺草をそのままの状態で染めることができる。

3. 織り (PL.3~5-6)

現在使用している経糸（ツラ）は「麻糸1300」と呼ばれる規格品で、大川市の企業から購入している。企業の方のお話では、以前は太い物であったが、栗山さんの要望で細い麻糸に変更された。細い麻糸を2本一組にすることによって「こしが強く」とのことである。以前は各家で麻を栽培し、撚った麻糸を経糸として使用していた。

「ワク（糸車）」に購入した麻糸を巻き直して織機上部の細い竹棒に通し、そこから麻糸を引いて「コテ」（PL.3-6）に通していく。現在使用している一木造りのコテは目が粗く「カケガワ（掛川か）コテ」と呼ばれ、孔数71、切れ目72でその幅は0.4cm。以前使用していた同じく一木造りのコテ（PL.4-1・2）は目の細かいもので孔数72、切れ目73でその幅は同じ0.4cm。長側面それぞれに「昭和三十九年九月」と「昭和39.9」と購入年月が墨書されている。前者は全長が108cm、幅8cm、後者が全長107.5cm、幅8cmである。いずれも柳川市で購入した。

「ワク」（PL.3-1~4）は2個有り、いずれも4本の自然竹が対角線上についている。いずれも片側面に刻印が有り、一つは「山口」（PL.3-3・4）、現在使用している物には「辻」（PL.3-1・2）とある。前者はユキさんが嫁ぐ前から使用されており、後者は東二軒隣の辻さんが使用していたのを、ござをうつのを止めてから譲ってもらった。

コテの孔や切込みに通す経糸の間隔・本数は種類によって異なるが、これを「ハエカタ（方）が違う」と呼ぶ。経糸は2本1組で、編目には計4本の経糸が通る。また、経糸の間隔の狭い部分を「シジメ」とも呼ぶ。ござの種類によって長さも異なるが、織機下部の八角形横棒を織機両端下部に空けられた孔に差し違えることと、八角形の横棒とコテの間に「コテノセ（乗せ）」をはさみ、「コテノセ」中央部の孔に通して水平に支えられた細い鉄製の棒（全長91.5cm、幅1.8cm）に経糸を括り付けることで調整する（PL.3-7）。

織機の孔は六ヶ所あり（PL.4-3）、上部から順に「赤ちゃんござ」用（以前は蓑裏用にも使用）、「座りござ一枚もん（一人座り）」用、「座りござ二枚もん（二人座り）」用（以前は「寝ござ（クゴモン）」[®]にも使用していたが、短いということで現在は「寝ござ」用には使用していない。）、「寝ござ」用（新たに穿った）、そして一番下が「仏さんの前」と「座りござ一間もん（三人座り）」用である。

「コテノセ」には二種類あり、「仏さんの前」と「寝ござ」用の長い物（PL.4-5）とそれ以外のござ用の短い物（PL.4-6）である。いずれも短側辺にコの字型の切込みがあり、全長は前者が40.5cm、後者が24.4cm。「ハエ方」が終わると、「コテノセ」を除く。

「ハエ」の終わった経糸やコテに、滑りを良くするために菜種油を染み込ませた布で拭

いていく。そして経糸がピンと張るまで、「ヤ（矢か）」2個（PL.4-7）を織機上部左右に「タンチョウ（木槌）」（PL.4-8）で打込む。この「ヤ」は織っていく途中でも、調子を見て「タンチョウ」で打込んでいく。

三角形の木製「ヤ」は全長が7.5cmと8.6cm、いずれも先端が丸くなっている。「タンチョウ」もユキさんが嫁ぐ前から使用されており、全長23.5cm、叩き部長14cm、径7～9cm。長年使用している為か断面が三角形を呈している。

こうして全ての準備が終了したところで、「ござうち（織り）」が始まる。織機右側に腰掛け（PL.5-2）、右下部の足踏み（PL.5-3）を踏むことによってコテを前後させて（PL.5-4）経糸を前後に開き、僅かな隙間に右手で持った「イサシ（藺指）」を使って藺草を通していき、コテの重みで藺草を叩き締める。「イサシ」は竹製の全長108cm、最大幅0.4cm、先端から1cmの所に三角形の切り込みがある（PL.5-1）。なお、織る前に藺草を水に浸けて柔らかくしておく。

また、織機下部の八角形横棒の右側4本の棒（PL.4-4）を手前に回すことにより、織り上がったござを順次巻き取り、「イサシ」を使う部位が常に同じ位置になるように調整していく。

種類によって染色した藺草、どの色をどの箇所は何本使用するかは、ある程度の規格はあるものの、栗山さん個人の配色等の好みで決まる部分が多い。ただ、「仏さんの前」と「座りござ」の市松模様は縦約四寸五分角であるので、寸法を測る際に墨で四寸五分の目盛りを入れた「ござの尺（市販の割り箸）」（PL.5-5）を使用する。

ある程度織り上がったら、左右両端の藺草を4本一単位にして経糸に折り込み（PL.5-6）、余分な部分は市販の包丁で切り落としていく。4本を一単位とする作業は藺草を数えることなく手の感覚のみで行うが、見事に4本一単位となる。永年の経験の賜と感心する他はない。

4. 仕上げ（PL.5-7・8）

「ござひっこみ」と呼ばれる最終工程で、経糸の一方を幅広の編目の間に折り込む作業である。使用する道具は竹製で、先端が丸く尖った全長13cm、幅1cm、厚さ1mm、断面は半円形を呈している（PL.5-8）。1回結んだ4～6本の経糸先端を、緯の藺草裏表間を通した道具の先にあけられた1.5cm、0.7cmの楕円形の穴に通し、これを引くことによって経糸を折り込み（PL.5-7）、余分な部分は包丁で切る。左右両端の「シジメ」の経糸は、編目の中に折り込まずに結ぶだけである。但し、この作業は「仏さんの前」については行わない。経糸は結んで切るだけで、その後に市販の畳表用の「へり（縁）」を縫い付ける。

花ござの年間製作枚数は、その年の注文等に依っても異なるが、以前は80枚前後の時もあったが、今は好きな時に自由に織っているとのことである。

5. 織機について（PL.2-5～8）

現在使用されている織機には裏側に「昭和二十四年四月十日求」と墨書されている（PL.2-8）。^③これは北隣地区の湯崎在住の市原金一氏が製作した物を購入した年月日で

表1 花ござ種別一覧 (PL.1-2~7)

	寸法 (cm)		経糸 本数	編目間隔 (cm)		模様一角寸法と 数 (横 × 縦)	製作 日数
	横	縦		広	狭 (シジメ)		
仏さんの前	93.5	191	88	3.5	1.0	15.5×17cm	1日
	3.08	6.30		22	22(両側に各3)	6×11	
座りござ (一枚もん) 1人座り	62.5	65	62	3.5	1.0	11.5×12.5cm	1日
	2.06	2.15		15	16(両側に各3)	5×5	
座りござ (二枚もん) 2人座り	62.5	126	62	3.5	1.0	11.5×13.5cm	1日
	2.06	4.16		15	16(両側に各3)	5×9	
座りござ (一間もん) 3人座り	62.5	187	62	3.5	1.0	11.5×14cm	1日
	2.06	6.17		15	16(両側に各3)	5×11	
寝 ござ (クゴモン)	86	177.5	62	3.5	1.0		1日
	2.84	5.86		23	8(両側に各3)		
赤ちゃんござ	66	121	48	3.5	1.0		1日
	2.18	3.99		18	6(両側に各3)		

「寸法」欄の下段は尺で示している。
 経糸は2本一組で、左右両端は3本一組である。
 「編目間隔」欄の下段はその数を示す。

ある。市原氏は織機を2~3台は作ったようであり、その内の1台である。栗山さんの小さかった頃は「二人うち」の織機であったが、結婚してから「一人うち」の織機を使用するようになったが、これが壊れたので大工の市原氏に作ってもらった。

二人うちの織機とは、右端に座った一人が藺指を使って藺草を経糸に指込み、中央に座った人物が両手でコテを上下して織り上げるもので、旧式二人織機と呼ばれる。現在の一人うちの織機とは、右下の足踏みによってコテを上下して経糸目を開き、右側から藺指で藺草を差込むもので、明治23年(1890)頃に福岡県筑後地方で考案された莫産織機と呼ばれるものであろう。

ほとんどが木製で昭和24年購入当時の姿を留め、コテを前後させる部分他の僅かな部位が新しい部材に取り換えられているのみである。莫産織機は明治・大正と改良が加えられ、自動織機も開発されているが、現在の織機は壊れた織機を恐らく忠実に真似たものであり、明治前期に開発された莫産織機とほとんど機能的には変わるところはない素朴なものである。

<註>

- ①川津在住の赤坂ナツさん(大正3年7月8日生)もいらっしゃったが、平成10年にご病気をされ、それ以降花ござは織られていなかった。平成11年10月30日にお亡くなりになられた。85歳であった。ご冥福をお祈りします。
- ②「クゴモン」の意味はよく分からないが、栗山さんは「九合もん」と表記している。
- ③ごんどうちあき(権藤千秋)は「織り機に、昭和三年九月九日と書いてありますよ」(「虹いろの須古ござを織る 栗山ユキさん」『童話と童詩の本 ブランコ』第10号 佐賀童話の仲間会「ブランコ」1998年)と記すが、実見に及ぶ範囲ではこのような年号はどこにも記されていない。

III. 藺草製品、主に花筵について

1. 古代の藺草製品について

イ（藺）はイグサ科イグサ属で、日本全国の野や山の湿地に生える多年草である。イグサ科の植物は世界各地の温帯・寒帯の湿地に多く見られ、原産地は不明であるが、一説にはインドと言われている。^①日本全国で古くから自生していたと考えられるが、縄文時代における藺草製の編物（蓆・筵）の確実な事例は、現在のところ知られていない。簡単な構造ではあったにしても織機が必要と考えられるので、蓆・筵が存在した可能性は少ないとされている。^②

1993年に青森県三内丸山遺跡から縄文時代前期のポシエットが出土し話題となった。発表当時は素材はイグサ科の植物とみられると報道されたが、鑑定の結果は単子葉類の茎とされ、イグサ科であるかどうかは確認できていない^③。イグサ科も単子葉類に含まれるので、蓆や筵の類いではなくとも、藺草を使用した製品の存在も考えられる状況になってきていると言えるだろう。

続く弥生時代になると、筵の確実な実例が北部九州の甕棺から出土している。橋口達也氏によると、福岡県太宰府市・筑紫野市・春日市・小郡市・穂波町出土の甕棺からはイグサ製と思われるタタミ表状の蓆片やワラ状のものがそれぞれ検出されている。^④その性質上残存状態の悪い例が多いが、中でも太宰府市吉ヶ浦の K49・54・67・72 や筑紫野市道場山の K100 のタタミ表状蓆片は、経糸 2 本を用いその間隔は「17mm、17～18mm、19～21mm、緯繊維は10mmあたり 9 本を測り、現在のタタミ面と全く同様の手法、形状」を示している。蓆片を出土する甕棺の時期は、橋口編年の K II a 式（中期前半）から K III c 式（中期後半）である。

甕棺の他に、飯塚市立岩の土壙墓 2 基や中間市上り立の 6 号石棺からは、副葬鉄器の床に面した部位に付着した状態でワラ状のものが検出されている。時期は前者が弥生時代、後者は中期後葉～後期初頭と報告されている。

甕棺内から検出された蓆片は、「人骨出土状態の上位、副葬鉄器の場合も上面に附着」していることから、「遺体をこれらの蓆ですまきにしていたことは確実」であり、石棺・土壙墓の場合は「甕棺と同様遺体を包んだものかどうか現時点では何とも言い難い」と述べられている。

現在までのところ、弥生時代の筵は上記のように北部九州の福岡県のみに出土が限られている。甕棺という地域性の強い埋葬法や時期性もあるにせよ、弥生時代の筵使用例が甕棺等に限定されるのではなく、また福岡県（筑前）のみに見られたものではなく、ある程度全国的な規模で、時期も幅広く考えるのが妥当なように思える。今後の発掘調査事例に伴い筵片の出土例が増え、使用例が判明することを期待したい。

古墳時代になると筵の実例は増加する。^⑤岡山市金蔵山古墳、岡山県月の輪古墳、奈良市円照寺墓山 1 号古墳、福井県立洞 2 号墳などから、鍔・鉄鏃・鏡・鉄剣に付着した状態で出土している。^⑥

金蔵山古墳からは「太さ 0.5cm 程の細い繊維を用い、編目一つの幅が約 1.0cm、編み方

は現今の畳面と全く一致」している蓆状の編物が付着した鈍片が出土している。材質鑑定の結果、藁ではないかとされている。

弥生時代や古墳時代の蓆の出土状況からすると、当時の蓆は住居の敷物として使用するのではなく、遺体や石室に副葬される器物を包む材料として使用されたものであろう。

奈良時代の蓆・畳の実例は、正倉院・法隆寺献納宝物や法輪寺に残されている。^⑨法隆寺については天平19年（747）の「法隆寺伽藍縁起并流記資材帳」通分雑物参拾伍種条に、

蓆壹伯貳拾壹枚二枚錦端 四枚緑端
五枚上野

長畳漆拾捌枚二枚錦端 一枚緑端 六枚黄端
卅二枚紺布端 十六枚白布端 八枚折薦

半畳玖拾参枚一枚錦端 五枚紫端 十三枚緑端
十七枚黄端 卅枚白布端 卅五枚折薦

とあり、各種の縁裂が巡らされた蓆や畳が知られる。現在残されているのは、濃淡二種の藁草で編んだ畳4枚で、二枚重ねのものと一枚で使用されたものである。後者のものは縁裂が巡らされたものであったことが確認されている。その他に、「竜鬢筵」と呼ばれる紫・緑・黄に染めた藁草を使用し、縁に紅地の牡丹唐草紋錦を付けた茵形式の筵も残されている。同様の竜鬢蓆は法輪寺にも残されている。

正倉院には「経に縫りの強い麻糸を用い、イグサを緯にし、緯の藁は経を二本越しに織った」筵として完形の藁筵10帖・藁筵残欠7枚・龍鬢袷筵残欠や碧緑の筵等7枚、褥心筵とされるもの15枚、「マコモ（薦）製の筵三枚を二つに折って六重にして、一旦綴じ、この表と両短側小口と裏面周までを一枚の藁筵」で包んだ御床畳2床分が残されている。^⑩『古事記』や『日本書紀』の海神が山神（ヒコホホデミノミコト）を歓待する場面に「八重蓆薦」「八重蓆」「菅八畳、皮畳八重、畳」が見られるが、正倉院に残る御床畳により、当時の使用法として薦等を重ねて折り曲げ表面に藁草を貼った畳の使用法を窺うことができる。また『万葉集』にも「木綿畳」「畳薦」「食薦」「薦畳」「八重畳」の語句が見られる。

平安時代の承平年間（931～937）に成立した『和名類聚抄』調度部坐臥具条に、

筵 説文云、筵、音延、无之路、竹蓆也、遊仙窟云、五綵龍鬢筵、今案俗又有九蝶筵依文名之、唐韻云、蓆、音與藉同訓同上、薦蓆也、

薦 唐韻云、薦、作甸反、古毛、蓆也、

とあり、筵は「竹蓆」つまり竹製の蓆とされているが、「筵」と「蓆」が同じ意味で使用されていたことは、『延喜式』民部省式の「交易雑物」に記されている武蔵国の龍鬢蓆・細貫蓆、上野国の細貫蓆が、『延喜式』内蔵寮式の「諸国年料供進」にはそれぞれ龍鬢蓆・細貫蓆、細貫蓆と記していることから明らかである。

諸国から貢納された蓆や薦等について、『延喜式』卷二十四 主計上から表2にまとめた。調・庸・中男作物、交易雑物・諸国年料供進として蓆や薦等を貢納した国は、山城・河内・摂津・和泉という畿内を中心に、東海道・北陸道・山陰道・山陽道の一部の国々と西海道の大半の国である。西海道からの貢納物は太宰府に集められ、その需要を賄ったものであろう。これらを見る限り、蓆や薦等はその原料が藁草や萱等であったにせよ、広く一般的に栽培され、また製作されていたものであったと考えて差し支えないと思われる。特に太宰府から貢納された藁帖筵は明らかに藁草製であり、九州諸国で藁草の栽

培が行われていたことを示しているのではないだろうか。

諸国から貢納された席や薦以外に、中央官庁、その中でも宮内省掃部寮[®]が管轄し製作していた。

凡掃部寮殖藺田一町。量置山城國便近之處。其營料者。以當國正税三百束。毎年充之。刈収者。即用本司仕丁。（『延喜式』卷第二十二 民部上）

凡營掃部寮藺田一町料稻三百束。毎年以山城國正税充彼寮。

（『延喜式』卷第二十六 主税上）

殖藺田一町。在山城國。耕殖卅一人。以當國正税雇充。刈得藺三百八十圍。寮家仕丁運。蔣沼一百九十町。在河内國茨田郡。刈得蔣一千圍。菅二百圍竝刈運夫以當國正税雇役。莞五百圍。摂津國徭夫刈運。（『延喜式』卷第三十八 掃部寮）

の記述から、山城国に藺田一町が存在し、正税（稻）三百束によって四十一人が耕植に従事していたこと、河内国茨田郡に蔣沼百九十町があり、蔣・菅・莞が収穫されていたことが判明する。

表2 諸国貢進の席・薦等一覧

国名	調	庸	中男作物
山城	廣席二百八十枚。狭席五百九十枚。折薦八百五十八枚。葉薦四百六枚。食薦千五百枚。		
河内	黒山席五十枚。折薦一千三百八十三枚。藺筥六十合。		
摂津	葉薦五百枚。折薦一千廿枚。		
和泉	藺筥四十六枚。藺筥十合。大五合。小五合。		
参河			席。
美濃	長席三百七十五枚。		
上野			「細町」席。
能登			席。韓薦。折薦。菅薦。
因幡			席。
伯耆			席。
周防	短席六百卅枚。		
筑前	席三百六十三枚。		席。防壁。蒲薦。韓薦。
筑後			席。防壁。薦。蒲薦。
肥前	自餘輸絹。絲。席。薄鯨。		葉薦。防壁。韓薦。蒲薦。折薦。
肥後			席。韓薦。蒲薦。防壁。折薦。
豊前			防壁。韓薦。折薦。
豊後	小町席卅張。		
薩摩		席。	

国名	交易雑物（民部省式）	諸国年料供進（内蔵寮式）
河内	薦二千五百枚。	
和泉		藺筥卅十六枚。
摂津	薦一千五百枚。	
武蔵	龍鬚席卅枚。細貫席卅枚。席五百枚。	龍鬚筵卅枚 細貫筵卅枚
常陸	席六百枚。	
信濃	細貫筵五十枚。	
上野	席九百枚。細貫席六十枚。	細貫筵六十枚。小町席三百枚。食筵一枚。
下野	席八十枚。	
因幡	席三百五十枚。	
出雲	席三百枚。	
周防	席三百五十枚。	
大宰府	藺帖筥百卅蓋。	藺帖筥一百卅蓋。

また、『続日本紀』宝亀元年（770）三月壬午（十九日）条に、

内掃部司員外令史正六位上秦刀良。本是備前國仕丁。巧造狹疊。直司卅餘年。以勞授從五位下。

とあり、備前国出身の秦刀良が四十年以上に渡り狹疊を巧みに作ってきた功績に対し、位階を正六位上から従五位下に昇格したとある。

伊藤実氏は「掃部所解」や『延喜式』掃部寮式にブランド名としての「葛野席」が見えることから、山城国の藺田は葛野郡に存在するとし、河内国茨田郡、更に秦刀良出身の備前国に共通するものとして、機織りの技術に優れていたとされる秦氏や秦氏系渡来人が考えられ、畳作りに深く関与していたとの見解を示している。^⑩

席や薦の種類・寸法については、『延喜式』卷二十四 主計上の畿内調、諸国調、中男作物の条に記されており、席には長席（長二丈、広三尺六寸）、黒山席（長一丈二尺、広四尺）、広席（長一丈、広四尺）、狭席さむしろ（二人席）（長一丈、広三尺六寸）、短席（長一丈、広三尺六寸、西海道諸国では広四尺）があり、薦には韓薦（長四丈、広七尺）、防壁（長四丈、広七尺）、葉薦すこも（広二丈、広四尺）、折薦（長二丈、広三尺六寸）、菅薦（長一丈二尺、広四尺）、食薦（長六尺、広二尺五寸）などがあったことが分かる。

時代は奈良時代に遡るが、天平勝宝7歳（755）の東大寺領「越前國桑原莊券」に、

席十枚 直卅束枚別三束
折薦十枚 直卅束枚別二束
簀十枚 直十束枚別一束

とあることから、折薦より長さは半分でしかない席の価格が折薦の1.5倍あったことが知られるのである。

各種の席・薦の製作に関して、『延喜式』卷第三十八 掃部寮には次のように規定されている。

織席一枚長九尺。廣五尺。料。擇藺一圍。苧十五兩。長功十人。五人織手人 藺手。中功十二人。短功十四人。

織席一枚長九尺。廣五尺。料。擇藺二尺八寸。苧十三兩。長功十一人。中功十一人。短功十二人。

織席一枚長九尺。廣三尺二寸。料。擇藺二尺四寸。苧四兩。長功八人。中功十人。短功十二人。

織席一枚長九尺。廣三尺二寸。料。擇藺二尺四寸。麻十三兩。長功八人。中功十人。短功十二人。

編食薦一枚長六尺。廣三尺。料。擇藺一尺五寸。生糸五銖。長功一人。中功一人。短功一人大半。

釋蔣チワコモノ食薦一枚長六尺。廣三尺。釋蔣二尺、麻十三兩。長功半人。中功大半人。短功一人。

薦一枚。長二丈四尺。廣四尺。長功一人。中功一人少半。短功一人大半。

薦一枚。長三尺。廣三尺。長功一人。中功一人少半。短功一人大半。

これらを見ると、席については「織る」、薦は「編む」と呼び分けられている。この用語の違いについて、小林行雄氏は「主として功数の長短によるもの」、また「(席を織る)

作業に布と同じく杼を使用するからであったかもしれぬ。』^⑩とされている。

平安時代後期以降の畳の使用法等については各種の絵巻物等から判明し、実物については福井県一乗谷朝倉氏遺跡他から出土している。^⑪

2. 須古における蘭草栽培の開始

白石町須古地区における蘭草栽培の開始に関し、地元では一般的に初代須古邑主^⑫龍造寺信周（龍造寺隆信の弟）が文禄の役の際、蘭草を朝鮮より移植させたのがその始まりである言われている。須古村第四代村長であった吉岡達太郎^⑬氏が著わした『須古村片影』には、信周の偉功として次のように記されている。

文禄ノ役、公ハ直茂公ニ従ヒ朝鮮ニ渡リ勇戦奮闘シ、長子家誠公ハ高麗城（現今ノ平壤）攻撃ニ於テ戦死シ、部下ニ多数ノ犠牲者ヲ出セシカ、公ハ斯ノ如ク兵馬倥傯ノ間ニモ意ヲ勸業ニ注カレ、家臣川津縫之助^⑭ニ命シ蘭草ヲ持参セシメ、領内ニ移植シテ菴蕙ヲ創始セシム。現在湯崎・川津ノ二部落ニ於ケル須古産ハ、公ノ遺業ナリ。

現在のところ、この記述が須古地区における蘭草栽培の開始に関する唯一の資料であるが、内容的には多々の疑問点があるので、以下で延べてみたい。

文禄の役とは、文禄元年（1592）に豊臣秀吉が明を征服する目的で朝鮮へ服属と明への先導を要求して起こした戦争である。全国の大名が出兵したが、第一陣として鍋島直茂が加藤清正・相良長安とともに名護屋より出陣している。直茂とともに朝鮮へ出兵した肥前国内の武将として、『直茂公譜』第六には「直茂公御供にて今度朝鮮渡海の人数」として「竜造寺彦右衛門家俊・松浦太郎信明」の名が、また『直茂公譜考補』第六巻には「当家朝鮮御供人数数着到」のなかに「竜造寺彦右衛門家俊早世・松浦太郎信昭後須古下総守」と見える。竜造寺家俊については、『歴代鎮西志』巻第卅一に「同安房守信周同其嫡子彦右衛門尉家俊」と記されているので、龍造寺信周の長子であることが分かり、『須古村片影』に記される「家誠公」とは「家俊」のことであろう。「松浦太郎信昭」は、須古第二代邑主須古下総守信明のことであり、当時は松浦丹後守盛の養子となり松浦姓を名乗っていた。^⑮

さて、家俊・信明兄弟の父である信周の名は、「直茂公御供にて今度朝鮮渡海の人数」や「当家朝鮮御供人数数着到」には見えずその動向は不明であるが、『歴代鎮西志』巻第卅二に「佐賀者竜造寺安房守鍋島豊前守為留守」と記されていることからすれば、『須古村片影』の記述の如く鍋島直茂に従い朝鮮へ出兵したのではなく、留守として佐賀に滞在し、家俊・信明兄弟が直茂とともに出兵したと考えるのが妥当であろう。

さて、朝鮮半島における家俊・信明兄弟、特に家俊を中心としてその足取りを、『直茂公譜考補』よりたどってみたい。

文禄元年4月下旬に慶尚道釜山浦に到着した直茂一行は、5月2日に忠清道王城に着、同14日には直茂陣所に彦右衛門（家俊）^⑯他が着陣している。同29日開城に着し、6月1日軍を四方向に分け、直茂一行は加藤清正・相良長安とともに咸鏡道方面に出立している。以後4月までの間、咸鏡道各地を転戦征服していき、7月26日に咸興に戻り、咸鏡道領内の安辺郡・徳原郡・文川郡・高原郡・定平郡・咸興郡・洪原郡・永興郡を直茂の領地とし城代を置くが、永興城の城代として龍造寺七郎左衛門・松浦市兵衛（信明）・龍造寺

右衛門・姉川兵右衛門・葉次郎右衛門とともに彦右衛門の名が記されている。

10月上旬の咸興府での合戦を経て、文禄2年の正月を咸興で迎える。ところが、小西行長らが守る平安道平壤が明の大軍に包囲され、同7日に王城へ撤退する事態が起こった。これを受け、直茂等も2月12日に咸興を発し同晦日に王城に到着、4月18日に王城を発し更に南下するのであるが、その条の「於朝鮮病死ノ輩」の中に「龍造寺彦右衛門」の名前が記されているのである。「当家朝鮮御供人数数着到」のなかの「龍造寺彦右衛門家俊早世」とあるのはこの事実を受けたものである。^⑧『須古村片影』の平壤城攻撃に際して彦右衛門が戦死したとの記述は、疑わしいと言わざるを得ない。

このように、龍造寺信周が朝鮮から藺草を持ち帰らせ領内に移植させたという伝承は、殆ど信憑性がないことが窺えるであろう。藺草を移植させたのが伝承のごとく信周でなく、家俊か信明のどちらかである可能性を全く否定できるわけではないが、前節でみたように、弥生時代の北部九州（福岡）で藺草製品が存在し、その後の平安時代には『延喜式』にみられるように西日本を中心に広く藺草が原料と考えられる席・蓆が製品化されていることからすれば、須古地区における藺草の栽培を文禄の役に関係して語るよりも、それ以前から、その時期については現在のところ全く手掛かりはないのであるが、行われていたと考えるほうがより妥当性があるように思われる。

3. 江戸時代の肥前国の藺草製品

江戸時代の肥前国において、どのような藺草製品が生産されていたのかを直接窺わせる資料はほとんど知られていない。以下、管見に及ぶ範囲で紹介してみる。

・『毛吹草』三^⑨（松尾重頼が正保2年（1645）に編纂した俳論書、諸国特産物の記載もある）

肥前

サガニタクミノオモテ
佐賀 畳 表

エムシロ
繪 蓆

・『和漢三才圖會』（寺島良安が正徳3年（1712）にまとめた図説百科事典）

「卷第三十二 家飾具」にハナムシロのことが記されている。

繪蓆佳文蓆初來於南京今肥州長崎攝州大坂多織之其赤色茜染黑色淤泥以成文

赤と黒に染めた繪蓆は中国南京よりもたらされ、肥前国長崎や摂津国大坂で多く織られているとある。また、「卷八十 肥前」に肥前国の土産として「畳 表 佐賀」「繪蓆 長崎」とある。ちなみに「卷七十四 摂津」の土産には「不悉記」と断りはあるものの、繪蓆は記されていない。赤と黒で染めた繪蓆とは花蓆のことであろう。

・『丹邱邑誌』卷之一（深江順房が弘化4年（1847）にまとめた多久の地誌的記録）

「土産」の項に「一蓆 椀島村産」とある。なお、「元文四（一七三九）年の椀島村田帳に藺田がある」^⑩から、『丹邱邑誌』がまとめられた19世紀中頃以前の18世紀前半には椀島村で藺草栽培・蓆生産が行われていたことは間違いのないであろう。

・『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』^⑪（資料1～3）（PL.6-1～4）

多久邑の勝手方（財務・行政を主管した部署）の日記である。文化8年（1811）の項に、北方郷椀嶋村の蓆のことが記されているが、関連して須古郷湯崎村の蓆についても触れられている。

資料一

一 椀嶋村より郡方筋へ差出候願控左之通

乍恐奉願口上覚

北方郷椀嶋村之儀以前より須古同様深田ニ付田作實入不仕候処より藺田作専ニ仕座打立候而右代物に米立替を以御物成相納来候處今度御領中旅座不入込

とふり御仕与之旨被相達候ニ付而ハ猶又手廣商賣

仕候半而不相叶然所他方より座調等□自然米杯

所持仕候義も有之候得共穀物札無之候而者至于時差支

義ニ御座候右様之節ハ脇村よりも色々申儀も御座有

穀物札尅枚被差免置被下度奉願候尤村中ニ而

吟味仕候處良太郎儀□道病身者ニ而作方等難

相成当年式十三歳ニ相成候右之者へ被仰付被下候半ハ

難有奉存候勿論御運上之儀ハ御定法之通尖ニ

納銀可然候条何卒願之通被仰付被下候様御筋々

宜敷被仰達可被下義深重奉願候以上

未閏二月

椀嶋村役

清 蔵

庄屋

弥三右衛門

徳永益左衛門殿

右之通奉願候条御筋々宜被仰達可被下候断

本文御座候以上

未閏二月

北方郷大庄屋印

久松弥五左衛門殿

資料二

乍願奉願口上覚

北方郷椀嶋村之儀山辺近深田之場所ニ而田作

仕候義不相叶候故往古より藺作仕座を打立賣

代を以御物成相納百姓相続之足ニ仕来候然處

今般須古郷湯崎村鐘ヶ江甚助より御領中

座惣元遣之義依願被差免候由就而ハ座持

運用 札被差免不被下候ニ付而ハ賣方可仕様

無御座候条別紙名書六人之者共楞札尅枚ツツ

被仰付被下度奉願候尤御運上之儀ハ御定法之通

日限無遲滞御上納可仕候勿論右之者共何レも

病身者計リニ而作方之儀不相叶者共ニ御座候条

何卒願之通被仰付被下候様御筋々宜被仰達可

被下義深重奉願候已上

未閏二月

椀嶋村役

清 蔵

〃庄屋

弥三右衛門

徳永益左衛門殿

右之通奉願上候御支所無御座候ハハ御筋々

被 仰達可被下候断前書御座候已上

未閏二月

北方郷大庄屋印

久松源五左衛門殿

名付覚

北方郷椀嶋村

四十才 久右衛門

三十五才 善藏

二十五才 忠兵衛

三十二才 徳右衛門

三十一才 久兵衛

三十五才 外右衛門

ノ六人

已上

未閏二月 椀嶋庄屋村役印

資料三

一 今度須古湯崎村より座惣請元願出候末其通ニ被差免候付椀嶋村へさまさま條書を以已来約定一札ニ連印いたし其通申懸候次第筋々奉一書右之次第^ニ而者

椀嶋村之難渋不少候付庄屋弥右三衛門其他より郷方及取合候様被相整候半水町一兵衛ニ藤崎源太夫□□□候節段々之訳合申咄候處當時御□座御仕□半

一□之差障ニ相見候由ニ付一刻も郷方より^者書付□□差返候様被申聞候故御勝手方へ写留ニ相成居候連引帳写水町まで差越候事

賣津御蔵米□切調子□
米貳拾貳石八斗 □附俵

内

欠米貳石八斗四升貳合

残有米拾九石九斗五升八合

ノル

右之通御座候已上

未五月朔日

右立會相調子申候已上候

米原五右衛門
藤崎源太夫
西 文蔵

資料1は栴嶋村から郡方への未閏二月付願書である。栴嶋村は以前から「須古同様」に深田で稲作ができず、藁を植え産をうってきた。今度領中に旅産が入り込まないように「御仕与之旨」が出されたため、今まで以上に手広く商売をしなければならない。他方より産の仕入れに米を持参してきた場合のために、病身で二十三歳の良太郎に穀物札を下付して欲しい、という内容である。

資料2も同様に栴嶋村から郡方への未閏二月付願書である。栴嶋村は深田で稲作ができないから昔から藁を作り産をうち、その代金で年貢を納めてきた。ところが、佐賀藩が須古郷湯崎村鐘ヶ江甚助に「産惣心遣」を認めたため、その支配下において産商売を営むための「産持運用楞札(免許札)」が必要になった。病身で稲作ができない別紙6人に下付して欲しい、という内容である。以上二つの願書が聞届けられたか否かは不明である。

資料3は未五月朔日付文書である。須古村に「産惣請元」を許されたために須古村から栴嶋村に様々なケ条書に連印するよう求めてきた。その内容は栴嶋村にとって難渋が多いものであるから、庄屋の弥右三衛門その他から郷方へ取り合った云々という内容である。

これらの資料から、須古郷湯崎村では確実に18世紀後半以前から藁草の栽培、産の製作が行われており、19世紀前半には産生産の中心地となっていたことが窺える。だからこそ、「産惣心遣」が須古村の鐘ヶ江甚助に許されたのであろう。栴嶋村の例から推測すれば、須古村での藁草栽培、産の製作は栴嶋村同様に18世紀前半まで遡る可能性は十分に考えられる。いずれにせよ、江戸時代における須古村での産の製作が直接的に判明する貴重な史料である。

・『儉法富強録』巻之二 幣金論^⑧

佐賀藩が財政窮乏の極みにあった天保3年(1832)、経済思想家の正司考祺が財政建て直しについて第10代藩主鍋島直正(閑叟)に献策したものである。その「巻之二 幣金論」に畳表のことが記されている。

- 一 藁表・七嶋表^⑨ノ價金ハ、國中一戸ニ疊十枚敷ニ配リテモ百万枚トナルヘシ。此ヲ四ケ年ニ一度表替ニ致セハ、一年ニ積リ大数銀五千貫目ノ散金トモナルヘシ。此皆肥後・備後・筑後ヨリ来入ス。此モ出奔者・賭博・疎業者ナク、能精勤ノ令行レハ自然ト國內ニ生スシ。

これに依れば、國中(佐賀藩中か)における藁表・七嶋表の需要は100万枚にもものぼるが、全てを肥後(熊本県)、備後(広島県)、筑後(福岡県南部)より購入しており、その購入金額も莫大なものである。そこで「能精勤ノ令行ルレハ」自然と藩内にも畳表の生産が行われると説いているのである。

17世紀中頃の『毛吹草』や18世紀前半の『和漢三才圖繪』には肥前の特産物や土産物として「畳表」が記されていることからすれば、『儉法富強録』の記された19世紀前半の状況として畳表の全てを他国から購入しているというのは、時代が下っているとはいえ、多分に誇張された表現ではなかろうか。『儉法富強録』を著わした目的が、佐賀藩財政建て直しのための献策であったことを考えると、領内でもその生産量は微々たるものではあったにせよ、藁草栽培、畳表製作が行われていたとするほうが自然であろう。

この他に、幕末の慶応3年(1867)2月からパリで開催されたパリ万国博覧会に、幕府・薩摩藩とともに佐賀藩も佐野栄寿左衛門(常民)を団長として各種特産物等を出展したが、その中に須古の花ござも含まれていたとされている。^⑧

4. 明治前期の藺草製品(莞蓆)

・明治の第1・2回内国勸業博覧会への出品(PL.7・8)

明治維新を迎え、須古邑は馬洗村・堤村・湯崎村の三村に分かれ、藺草の栽培は湯崎村字湯崎と川津で行われていた。明治10年(1877)8月21日～11月30日に東京の上野公園で開催された第1回内国勸業博覧会に、湯崎村から莞蓆(ハナゴザ)が出品されている。当時の長崎県勸業課^⑨がまとめた『明治十年内國博覧會自費出品目録』(PL.7-1・2)、(以下『明治十年自費出品目録』と記す。)と『明治十年第一回内國博覧會出品目録并解説書褒状寫』(PL.7-3～5)(以下『明治十年解説書』と記す。)がある。^⑩

『明治十年自費出品目録』と『明治十年解説書』「出品目録」の「各色ノ藺」とあるのは、『明治十年解説書』「出品解説」にある「赤色ハ蘇枋黒ハ唐櫨ノ葉」^⑪のことであり、白色というのは乾燥した藺草の色である。つまり当時の花ござは紅と黒の二色であったことが判明する。このことは、「組合(後に詳述する)ができるまでは赤と黒だけだった」という現在の織り手の栗山ユキさんからの聞き取り調査と合致する。

「出品解説」では、湯崎村字湯崎と川津で栽培された藺草を使用して各戸で機織りされており、種類としては椽座・畳表・上敷蓆がある。生産高は一年あたり約19,780枚、金額は一年あたり約1,046円50銭とある。また興味深いのは、その起源等は地元でも不明とされている点である。このように各戸で織られた多量の花ござの中から五枚(当初は三枚であったのか)を厳選して、「士族 西五左衛門」^⑫が自費で出展している。

また同14年(1881)3月1日～6月30日に上野公園で開催された第2回内国勸業博覧会にも、同様に湯崎村の西五左衛門が花ござを自費出品している。これも又、長崎県勸業課がまとめた『明治十四年第二回内國博覧會出品願并出品解説書』(PL.8-1・2)(以下『明治十四年出品願』と記す。)と『明治十四年第二回内國博覧會出品目録并褒状寫』(PL.8-3・4)(以下『明治十四年出品目録』と記す。)を見てみたい。

『明治十四年出品願』には「大小二枚」を出品したいと願い出ているが、『明治十四年出品目録』によると、実際は大小合わせて六枚が出品されたようである。ここには「製造人 西 五左衛門」とあるが、西氏が自分で製造したと考えるよりも、明治10年の際と同じく各戸で製造したものを選んだのが西氏と捉えたほうが良いと考えられる。また花ござの規格と原価については、『明治十年自費出品目録』に記された「縦二尺三寸八分横二尺二寸八分」と「縦六尺三寸五分横三尺」の花座が、それぞれ『明治十四年出品目録』中の「凡二尺五寸角」と「長六尺巾三尺」の紅黒花織に相当すると思われるが、原価は前者が一枚あたり八銭から十五銭に、後者が二十五銭から四十銭に値上がりしていることが窺える。ただ、『明治十四年出品目録』に別筆で「同五十五銭」「同卅三銭」とあるのは、後日それぞれの単価が値上がりしたことを示しているのであろうか。

5. 明治後期・大正・昭和初期の蕘蕘・莞蕘

・須古村莞蕘製造組合の結成

大正時代に花蕘の組合が結成された事情について、筆者の吉岡達太郎氏が村長時代のこととして『須古村[®]片影』に次のように記している。

始祖信周公カ文禄ノ役、家臣川津縫之助ニ命シ、朝鮮平壤ヨリ藺草を移植シテ莞蕘業ヲ奨メシカ、爾来三百五十余年ヲ経ヘ川津・湯崎ノ二部落ニ存続シ、本村副業トシテ裨益スル処尠カラサルヲ以テ、事業ノ拡張ト販売ノ発展ヲ図ルニハ組合設置ノ必要ヲ認め、大正二年四月、両区ノ有志者赤坂義吉・竺専一・渡辺剛・赤坂徳市・石橋安太郎・赤坂勝市ノ諸氏ニ諮リ、新タニ莞蕘組合ヲ組織セシメ、数回ニ涉リ県部署ノ補助ヲ請願シ、福岡・岡山・神戸ノ各地ニ於ケル田園・工場及販売所ヲ視察セシメ、工場ノ建設・器械ノ購入、教師ノ雇傭等専ラ事業ノ拡張改善ト、及販売ノ発展ヲ奨励シタリ。

この記述によれば、莞蕘業の拡張改善、及び販売拡張の為に福岡・岡山・神戸を視察し、大正2年(1913)4月に県補助金を得て「莞蕘組合」を結成したとある。しかしながら、『杵島郡統計書』に依れば名称は「須古村莞蕘製造組合」、設立年月日は「大正元年十二月九日」で、組合員数は106となっている。

視察対象とされた福岡・岡山は、江戸時代から藺草の生産地として有名であり、花蕘の生産も行われていた。岡山では明治14年(1881)に花蕘の輸出が開始され、同27年(1894)には旧式2人織機に替わる足踏1人織機(特許第2177号蕘織機)が発明されている。

福岡(筑後地方)では幕末の安政6年(1859)には長崎港においてオランダ人相手に商いが始められ、明治23年(1890)頃、蕘産織機が考案された。更に27年(1894)には岡山県より足踏1人織機を導入、同時に同地から教師を招聘し技術の伝授を受け、同32年(1899)5月に福岡県花蕘同業組合が設立されている。

神戸では明治7年(1874)から地蓆(花蓆)の輸出が開始され、同38年(1905)3月、兵庫県武庫郡西灘村(現神戸市)に、花蓆の粗製乱造を戒めその品質などを定めて取引上の安定を図ることを目的に、農商務相所管の花蓆検査所が設置されている。神戸港における花蓆の輸出額は表3のように、明治33年(1900)から大正2年(1913)に限ると、同39年(1906)の約580万円を最高に約320万~570万円で、横浜・大阪・長崎・門司などと比較して実に97%以上を占めていた。また神戸港の全輸出額における花蓆の割合は3~6%であるが、常に3~6位を占めていたように、花蓆は神戸港における主要輸出品目の一つであったのである。

このようなことから、福岡・岡山では組合の組織運営・生産技術・機織り機具等、神戸では輸出に関する手続き・花蕘の品質基準等を視察し、その成果を活かして組合が結成されたものであろう。ちなみに、広島では明治19年(1886)に備後本口畳表業組合が設立、同31年(1898)には岡山県から足踏1人織機を導入、明治末年には全面的に転換された。花蕘の製造も明治中期から盛んに行われ、明治後期には畳表の約4倍に達していたが、なぜか視察対象地からは外れている。

表3 明治時代末期の花菴輸出高港別一覧

(単位：円)

	神 戸	横 浜	大 阪	長 崎	門 司 他	合 計
明治33年	3,221,578	6,372	7,540	2,305	72,247	3,310,042
明治34年	5,215,369	2,430		3,882	131,718	5,353,399
明治35年	6,551,689	2,660	588	1,367	216,194	6,772,498
明治36年	4,603,122	5,026	641	3,148	39,529	4,651,466
明治37年	4,910,404	3,097	419	1,156	2,277	4,917,353
明治38年	5,074,376	4,342	2,853	1,002	4,131	5,086,704
明治39年	5,813,056	4,618	2,811	123	6,931	5,827,539
明治40年	5,726,835	4,144	3,044	92	6,452	5,740,567
明治41年	5,741,060	3,157	3,218	5	4,600	5,752,040
明治42年	4,576,305	2,580	1,652	34	7,964	4,588,535
明治43年	3,887,482	25,492	5,841		3,435	3,922,250
明治44年	3,702,593	17,295	12,278		7,418	3,739,584
明治45年	3,707,521	6,365	15,415	36	12,661	3,741,998
大正2年	4,006,368	4,237	22,133	57	31,508	4,064,303

備考

明治33年～36年ニ於ケル門司其ノ他欄ニ比較的多数ノ統計ハ当時外商テーラーカーパー商会ガ筑後国三潯郡大莞村ニ花菴ノ買入店（出張所）ヲ設ケ、水田村、柳川町ト移ッテ購入門司港ヨリ出荷輸出シタコトニヨル。尚検査ハ神戸ヨリ出張検査。

(『福岡県の蘭業誌』表9-4を転載、一部改変)

「須古村莞菴製造組合」が結成された大正元年以前の明治後期と、それ以降の真菴及び莞菴について、『佐賀縣統計書』と『杵島郡統計書』から県内の動向を探ってみよう。

まずその前に、これから述べる莞菴・真菴の定義を明らかにしておく必要がある。莞菴は本来は蘭草で織られた菴を指すが、明治後期・大正以降は花菴の意味で使用されている。では花菴とは何か。紡績糸を経糸とし、長さ122～135尺(36.97～40.91m、約40ヤード)に連続して織られた1本の長真菴のことで、1本は真菴約20枚分と換算されている。一方、真菴は緯糸に蘭草又は七島蘭を織り込んだ1枚物の総称である。

製造戸数については「畳表及真菴」「輸出向莞菴」「畳表真菴輸出向莞菴」の3項目に分類されている(表4)が、「畳表真菴輸出向莞菴」とは畳表・真菴及び輸出向け莞菴を製造する戸数と捉えられる。明治39年(1906)から大正元年(1912)までは三養基郡を中心として「畳表及真菴」が合計約1,100～1,200戸あり、杵島郡内は僅かに40～50戸に過ぎない。それ以外の「輸出向莞菴」「畳表真菴輸出向莞菴」については佐賀市・佐賀郡・杵島郡で合わせても10戸にも満たない状況であるが、「須古村莞菴製造組合」が結成された大正元年には杵島郡で「畳表真菴輸出向莞菴」が82戸と大幅に増加している。

次に生産高については真菴(本間真菴・並真菴・その他)と輸出向莞菴に分類されている(表5)が、真菴は並真菴を主体として明治39年から同44年(1911)までは、同42年の約29,000本、約6,000円を最高に約13,000本から約25,000本、約2,000円から約5,000円と増加している。輸出向莞菴については、逆に明治42年(1909)に大幅に減少し翌年以降微増するが、大正元年には半減している。大正元年には杵島郡での生産高が記録されているが、それまでの中心を占めていた佐賀市が同3年(1914)まで記録されていない。

表4 県内真蕨及び莞苳製造戸数一覧

年度 市郡	明治39年				明治40年				明治41年			
	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計
佐賀市		2		2		1		1		1		1
佐賀	42	1	3	46	27		3	30	29	1	7	37
神埼	63			63	172			172	25			25
三養基	895			895	902			902	903			903
小城					20			20	8			8
西松浦	1			1								
杵島	41			41	52		3	55	54		3	57
藤津	35			35	39			39	42			42
合 計	1,077	3	3	1,083	1,212	1	6	1,219	1,061	2	10	1,073

年度 市郡	明治42年				明治43年				明治44年			
	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計
佐賀市			1	1			1	1			1	1
佐賀	39	1	6	46	32		5	37	25		6	31
神埼	181			181	155			155	138			138
三養基	912			912	956			956	940			450
小城	7			7	8			8	4			4
杵島	52			52	54			54	53			53
藤津	38			38	43			43	41			41
合 計	1,229	1	7	1,237	1,248		6	1,254	1,201		7	1,208

年度 市郡	大正元年				大正2年				大正3年			
	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計	畳表及 真蕨	輸出向 莞苳	畳表真蕨 輸出向莞苳	合 計
佐賀市	1			1	1			1	1			1
佐賀	10	1	3	14	11		8	19	12		5	17
神埼	147			147	308		?	308	308			308
三養基	965			965	938		1	939	938			938
小城	4			4	2			2	2			2
杵島	53		82	135	85	53	129	267	85	52	131	268
藤津	41		85	41	39			39	41			41
合 計	1,221	1	170	1,307	1,384	53	138	1,575	1,387	52	136	1,575

年度 市郡	大正4年		大正5年		大正6年		大正7年		大正8年		大正9年		大正10年	
	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数
佐賀市	2	1							6	6			1	1
佐賀	12	12							1	1			2	1
三養基									1	1	1	1	2	2
小城	2	1							2	1				
杵島	177	118	176	121	278	139	299	145	228	152	141	140	143	143
合 計	193	132	193	135	291	152	307	153	238	161	142	141	148	147

大正5年から同7年までは『佐賀県統計書』が残されていないために、郡別の詳細は不明であるが、杵島郡の戸数は『杵島郡統計書』によって判明する。

	職工	戸数
大正11年	149	147
大正12年	161	150
大正13年	157	154
大正14年	175	173
昭和元年	265	264
昭和2年	241	241
昭和3年	235	235

年度 郡	昭和4年		昭和5年		昭和6年		昭和8年		昭和9年	
	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数	職工	戸数
佐賀	46	46	1	1	26	21				
杵島	144	144	138	138	136	136	128	128	128	128
合計	190	190	139	139	162	156	128	128	128	128

年度 郡	昭和10年		昭和11年	
	職工	戸数	職工	戸数
杵島	128	118	118	105
合計	128	118	118	105

昭和20年	-
昭和21年	68
昭和22年	120
昭和23年	38

昭和25年	
三養基	2
東松浦	3
西松浦	2
杵島	99
合計	106

大正11年から昭和3年まで、昭和20～23年までの『佐賀縣統計書』が残されていないために、郡別の詳細は不明である。

不思議なのは、明治39年から大正3年までの製造戸数では三養基郡が中心を占めているものの、生産高については三養基郡は全く記録が無いことである。反対に佐賀市・佐賀郡では製造戸数は僅かであるものの、生産高については上位を占めていることである。その理由はよく分からないが、三養基郡内で製造されたものが佐賀市・佐賀郡内から出荷されたものであろうか。

いずれにせよ、大正元年以降の莫産（並莫産）及び輸出向莞莖の生産高については、いずれも杵島郡が90%以上と圧倒的な中心を占めるようになってきている。このことはとりもなおさず、「須古村莞莖製造組合」が結成されたことが大きな要因であるとみて間違いないであろう。

では生産された莫産、特に輸出向け莞莖はどこに輸出されていたのであろうか。大正元年以前の明治後期の莫産については、明治39年・同44年に生産高の10%を越えたのみで、僅か5%以下が長崎と福岡に県外輸出されているのみである。反対に約2～3倍もの量が福岡（明治40年のみ福岡と大分）から輸入されている（表6）。輸出向け莞莖については明治43年のみ表5との数値が一致するのであるが、神戸・長崎へ県外輸出されている。前述した花莖検査所が現在の神戸市に設立された明治38年以前の資料がないので不明であるが、表2にみられるように明治39年から長崎港での輸出高が大幅に減少していることから、同41年（1908）までは大半が、翌42年からは全てが神戸へ県外輸出され、花莖検査所での品質検査等を受けて神戸港から海外へ輸出されたものであろう。

『花莖検査所年報』からまとめた全国普通花莖生産額の一覧（表7）がある。明治36年（1903）から同40年までの全国集計であるが、表7の明治39・40年の集計と比較してみると、同39年の1,066本、6,277円に対し1,036本、6,067円、同40年の881本、5,779円に対し866本、5,709円となっている。このことは、花莖検査所に於ける検査等の結果、不合格品があったことを示しているのであろう。

大正時代の状況はどのようなものであったろうか。まず『杵島郡統計書』により郡内の状況を見てみよう。大正5年（1916）からの統計であるが、莞莖（この場合は莫産と花莖の総称として使用されていると思われる）価格（表8）は須古村を中心に順調に上昇し、同8年（1919）1月に組合員数30の「橋下村[®]杵島莞莖製造組合」も結成されたこともあり最大を迎える。しかし、同9年になると橋下村のみが増加、須古村で前年比の20%、橋下村で同28%、最もひどい武雄町では0にまで落ち込んでいる。これは同年の大

表5 県内真蕨及び輸出向け莞莖生産一覧

年度 市郡	明治39年								
	真 蕨						輸 出 向 莖		合 計 価 格
	本間 真 蕨		並 真 蕨		そ の 他		数 量 (本)	価 格 (円)	
	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)			
佐賀市							1,036	6,067	6,067
佐賀	880	264	1,780	445	6,540	1,046	30	210	1,965
西松浦	28	6	57	9					15
杵島			2,918	379	1,220	49			428
藤津			220	44					44
合 計	908	270	4,975	877	7,760	1,095	1,066	6,277	8,519

年度 市郡	明治40年								
	真 蕨						輸 出 向 莖		合 計 価 格
	本間 真 蕨		並 真 蕨		そ の 他		数 量 (本)	価 格 (円)	
	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)			
佐賀市							816	5,304	5,304
佐賀	900	288	2,520	504	6,780	1,017	40	320	2,129
神埼			3,600	1,296					1,296
小城					50	7			7
杵島			4,400	924	860	86	25	155	1,165
藤津	30	12	346	69	112	22			103
合 計	930	300	10,866	2,793	7,802	1,132	881	5,779	4,700

年度 市郡	明治41年								
	真 蕨						輸 出 向 莖		合 計 価 格
	本間 真 蕨		並 真 蕨		そ の 他		数 量 (本)	価 格 (円)	
	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)			
佐賀市							816	5,304	5,304
佐賀	1,405	633	4,410	822	6,030	905	195	1,365	3,725
神埼	80	36	920	184					220
杵島	30	14	8,140	1,628	1,172	117	10	250	2,009
藤津	50	23	610	123	225	39			185
合 計	1,565	706	13,780	2,757	7,427	1,061	1,021	6,919	11,443

年度 市郡	明治42年								
	真 蕨						輸 出 向 莖		合 計 価 格
	本間 真 蕨		並 真 蕨		そ の 他		数 量 (本)	価 格 (円)	
	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)			
佐賀市			800	240			216	864	1,104
佐賀	1,230	554	3,485	697	5,380	807	60	420	2,478
神埼	100	39	1,000	200					239
杵島			11,350	2,610	2,560	179			2,789
藤津	80	35	2,010	442	1,050	210			687
合 計	1,410	628	18,645	4,189	8,990	1,196	276	1,284	7,297

年度 市郡	明治43年								
	真 蕨						輸 出 向 莖		合 計 価 格
	本間 真 蕨		並 真 蕨		そ の 他		数 量 (本)	価 格 (円)	
	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)	数 量 (枚)	価 格 (円)			
佐賀市	750	225					240	1,008	1,233
佐賀	938	216	2,275	410	4,575	641	95	437	1,704
神埼	100	39	900	171					210
小城	250	100	150	30					130
杵島	150	60	10,630	2,658	2,170	141			2,859
藤津	78	33	685	158	582	87			278
合 計	2,266	673	14,640	3,427	7,327	869	335	1,445	6,414

年度 市郡	明治 44 年								合計 価格
	莫 蔭						輸 出 向 莖		
	本間 莫蔭		並 莫蔭		そ の 他		数量(本)	価格(円)	
数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)				
佐賀市	1,440	479					240	1,200	1,679
佐賀	1,090	272	1,850	370	4,275	641	100	550	1,833
神埼	85	34	870	174					208
小城	220	59	160	52					111
杵島	200	76	10,840	2,493	2,380	167			2,736
藤津	62	26	738	157	673	68			251
合計	3,097	942	14,458	3,226	7,328	876	340	1,750	6,818

年度 市郡	大 正 元 年								合計 価格
	莫 蔭						輸 出 向 莖		
	本間 莫蔭		並 莫蔭		そ の 他		数量(本)	価格(円)	
数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)				
佐賀市	1,098	713							713
佐賀	160	42	560	112	240	16,036	24	140	16,330
神埼	80	32	865	173					205
小城	120	36	200	40					76
杵島	370	148	107,584	21,517	1,659	149	120	660	22,474
藤津	76	32	442	106	226	38	14	80	256
合計	1,904	1,003	109,651	21,948	2,125	16,223	158	880	40,054

年度 市郡	大 正 2 年								合計 価格
	莫 蔭						輸 出 向 莖		
	本間 莫蔭		並 莫蔭		そ の 他		数量(本)	価格(円)	
数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)				
佐賀市	2,100	735							735
佐賀	650	177	1,305	261	2,250	6,937	80	320	7,695
神埼	100	40	830	166					206
三養基							20	117	117
小城	50	25	220	55					80
杵島	3,370	1,348	27,000	5,400	11,450	1,031	2,160	10,800	18,579
藤津	15	5	400	106	100	25			136
合計	6,285	2,330	29,755	5,988	13,800	7,993	2,260	11,237	27,548

年度 市郡	大 正 3 年								合計 価格
	莫 蔭						輸 出 向 莖		
	本間 莫蔭		並 莫蔭		そ の 他		数量(本)	価格(円)	
数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)				
佐賀市	2,500	750							750
佐賀	600	156	1,220	244	2,200	6,830	75	150	7,380
神埼	80	34	540	108					142
小城	60	24	250	63					87
杵島	3,700	1,480	29,000	5,900	65,500	4,585	1,721	8,605	20,570
藤津			1,118	335	86	22			357
合計	6,940	2,444	32,128	6,650	67,786	11,437	1,796	8,755	29,286

年度 市郡	大 正 4 年						
	真 産 及 び 莞 蕈						
	四十ヤード物		藺枕用真産		そ の 他		合 計
数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格	
佐 賀 市					2,500	750	750
佐 賀			110,000	1,100	1,960	787	1,887
神 埼					650	228	228
三 養 基	14	84					84
小 城					450	140	140
杵 島	575	2,760			69,500	10,425	13,185
藤 津					130	34	34
合 計	589	2,844	110,000	1,100	75,190	12,364	17,408

大正4年から標式が変更されている。

年度 市郡	真 産 及 び 莞 蕈						
	四十ヤード物		藺枕用真産		そ の 他		合 計
	数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格
大正5年	677	3,507	530,000	4,240	57,040	10,807	18,554
大正6年	308	3,559	490,000	4,810	93,746	22,234	30,603
大正7年	278	3,662	490,000	4,900	217,316	66,119	74,681

この3ケ年の郡別詳細は不明。

年度 市郡	大 正 8 年						
	真 産 及 び 莞 蕈						
	四十ヤード物		藺枕用真産		そ の 他		合 計
数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格	
佐 賀			1,070,000	21,400	1,918	926	22,326
神 埼					200	220	220
三 養 基					150	35	35
小 城					1,460	949	949
杵 島	230	4,240			203,660	62,233	66,473
合 計	230	4,240	1,070,000	21,400	207,388	64,363	90,003

年度 市郡	大 正 9 年					大 正 10 年				
	真 産 及 び 花 蕈					真 産 及 び 花 蕈				
	藺枕用真産		そ の 他		合 計	藺枕用真産		そ の 他		合 計
数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格	
佐 賀	1,070,000	21,400	1,290	709	22,109	1,060,000	21,200	500	400	21,600
神 埼								50	28	28
三 養 基			150	35	35			200	190	190
杵 島			51,500	16,270	16,270			32,150	15,548	15,548
合 計	1,070,000	21,400	52,940	17,014	38,414	1,060,000	21,200	32,900	16,166	37,366

種 別 年 度	真 産 及 び 花 蕈						
	四十ヤード物		藺枕用真産		そ の 他		合 計
	数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	価 格
大正11年	30	300	440,000	8,800	31,932	14,042	23,142
大正12年	30	300	454,000	7,130	42,182	14,855	22,285
大正13年	30	300	418,000	5,400	58,338	15,251	20,951
大正14年	20	170	395,000	5,100	52,518	14,092	19,862
昭和元年	20	170	39,000	4,300	44,240	9,583	14,053
昭和2年	20	160	330,000	3,720	58,450	12,290	16,170
昭和3年	20	160	160,000	1,700	56,620	10,972	12,832

7ケ年の郡別詳細は不明。

年度 市郡	昭和4年						
	真蕨及び花蕨						
	四十ヤード物		藺枕用真蕨		その他真蕨		合計 価格
数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)		
佐賀	20	160	106,000	1,120			1,280
杵島					50,650	8,240	8,240
合計	20	160	106,000	1,120	50,650	8,240	9,520

年度 市郡	昭和5年						
	真蕨及び花蕨						
	四十ヤード物		藺枕用真蕨		その他真蕨		合計 価格
数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)		
佐賀	20	120	118,750	950			1,070
杵島	50	215			43,100	7,491	7,706
合計	70	335	118,750	950	43,100	7,491	8,776

年度 市郡	昭和6年					昭和7年				
	真蕨及び花蕨					真蕨及び花蕨				
	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格
数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(本)		価格(円)	数量(枚)	価格(円)		
佐賀	0	0	103,000	1,060	1,060					
杵島	30	96	51,050	6,550	6,646					
合計	30	96	154,050	7,610	7,706	35	109	53,230	66,560	6,765

昭和7年の郡別数量等は不明。

年度 市郡	昭和8年					昭和9年				
	真蕨及び花蕨					真蕨及び花蕨				
	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格
数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(本)		価格(円)	数量(枚)	価格(円)		
杵島	33	99	37,060	5,561	5,660	34	102	35,300	5,400	5,502
合計	33	99	37,060	5,561	5,660	34	102	35,300	5,400	5,502

年度 市郡	昭和10年					昭和11年				
	真蕨及び花蕨					真蕨及び花蕨				
	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格	四十ヤード物		その他真蕨		合計 価格
数量(本)	価格(円)	数量(枚)	価格(円)	数量(本)		価格(円)	数量(枚)	価格(円)		
杵島	35	101	32,400	4,716	4,821	32	96	30,720	4,883	4,883
合計	35	101	32,400	4,716	4,821	32	96	30,720	4,883	4,883

	その他
昭和20年	12,500
昭和21年	10,200
昭和22年	6,320

郡別の詳細は不明。

年度 市郡	昭和23年	昭和25年
	その他	その他
神埼	0	160
東松浦	0	407
西松浦	0	5
杵島	6,200	6,250
合計	6,200	6,832

表6 県内莫産及び輸出向け莞莖輸出入一覧

	莫			産		
	数量(枚)	価格(円)	輸出先	数量(枚)	価格(円)	輸入先
明治39年	3,000	540	福岡・長崎	42,830	8,624	福岡
明治40年	1,250	275	長崎	49,310	12,426	大分・福岡
明治41年				39,910	9,392	福岡
明治42年	1,500	300	長崎・福岡	48,190	9,496	福岡
明治43年	1,000	200	長崎・福岡	51,500	10,410	福岡
明治44年	3,290	846	長崎・福岡	49,480	10,186	福岡
大正元年	2,300	773	長崎・福岡	36,088	7,054	福岡
大正2年	300	75	長崎・福岡	40,830	8,792	福岡
大正3年	?	190	長崎・福岡	42,810	8,894	福岡
大正4年	1,000	300	長崎・福岡	31,380	7,433	福岡
大正8年	?	?	長崎・福岡	68,408	42,066	福岡
大正9年	11,800	4,900	長崎	60,770	37,002	福岡
	豊表莫産花莖					
大正10年		5,040	長崎・福岡他		291,803	熊本・福岡
	豊表莫産莖					
昭和4年	1,144,960	93,392	福岡・長崎	184,429	142,305	福岡・岡山他
昭和5年	698,270	66,064	福岡・長崎	192,200	97,782	大阪・福岡他
昭和6年	268,880	51,973	福岡・長崎	389,540	101,891	大阪・福岡
	蘭製品					
昭和8年	36,000	10,800	長崎・福岡	159,372	87,641	大分・福岡
昭和9年	7,150	10,250	長崎・福岡	?	?	大分・福岡
昭和10年		1,430	長崎・福岡		70,057	福岡・大分他
昭和11年		10,375	長崎・福岡		88,730	福岡・熊本

大正8年の数値は、県立図書館の『佐賀縣統計書』そのものが不鮮明なコピーであり、数値が読み取れない。
昭和10年から数量は記録されていない。

	輸出向け莞莖					
	数量(本)	価格(円)	輸出先	数量(本)	価格(円)	輸入先
明治39年	1,116	6,307	神戸・長崎			
明治40年	1,076	6,381	神戸・長崎			
明治41年	1,090	6,432	神戸・長崎			
明治42年	1,080	6,352	神戸			
明治43年	335	1,445	神戸			
明治44年	100	550	神戸			
大正元年	24	140	神戸			
大正2年	2,140	8,988	神戸			
大正3年	1,721	8,605	神戸			
大正4年	600	3,000	神戸	330	1,550	福岡
大正8年	?	?	神戸	1,770	12,735	福岡
大正9年	0	0		3,850	22,755	福岡

大正8年の輸出数量等は、コピーの数字が不鮮明で読み取れない。

表7 全国普通花蕨生産額一覧(明治36~40年) 単位:数量(本)、単位(円)

年度	明治36年		明治37年		明治38年		明治39年		明治40年	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格	数量	価格	数量	価格
北海道							5	9		
東京									60	450
兵庫	80	600	350	1,750	357	2,680	1,050	7,885		
栃木							52	480		
奈良					20	不祥			22	145
愛知	66	531	280	1,456	350	5,520	450	3,375	750	5,850
静岡							300	2,230	180	1,280
滋賀	78	502	33	343	49	324			95	不祥
宮城	260	1,236	140	970	237	1,778	1,555	690	40	405
福島	80	304			400	120			10	30
岩手	850	4,605	550	3,025	7	8	5	40	43	659
青森							27	194		
山形	94	940	115	1,150					350	1,575
秋田							60	420		
福井	5,582	35,867	950	7,736	667	4,557	942	6,802	484	1,008
石川	33,783	168,925	19,924	99,620	36,055	241,568	15,603	115,462	9,376	70,320
富山	520	3,640	700	4,900	333	2,145	952	4,045	323	2,497
島根	236	1,028	150	900						
岡山	390,015	2,907,348	379,831	2,835,410	360,515	2,893,480	382,823	3,137,491	418,667	3,416,086
広島	130,089	726,408	102,298	665,522	82,639	578,473	99,764	698,348	127,804	932,969
山口	1,300	8,400	3,650	23,765	2,560	18,688	2,560	20,224	1,156	8,280
和歌山					12	108				
徳島	1,560	10,140	1,595	9,458	1,455	10,334	1,317	9,045	284	2,130
香川	16,315	91,325	10,974	66,971	10,662	118,041	17,741	157,503	32,846	180,485
愛媛	599	3,714	759	3,686	384	2,260	1,279	9,710	875	6,049
高知	7,239	39,113	4,850	28,170	3,332	19,832	2,090	14,600	2,266	16,342
福岡	82,173	294,763	87,295	318,903	106,687	533,435	143,314	859,884	142,023	880,543
大分	8,199	36,283	21,231	63,415	13,624	81,206	1,162	7,291	310	2,300
佐賀	350	1,575	120	336	700	3,640	1,036	6,067	866	5,709
熊本					600	3,300	1,500	10,500	1,570	11,935
鹿児島								1	13	
合計	679,468	4,337,247	635,795	4,137,486	621,645	4,521,497	675,587	5,072,296	740,413	5,547,047

備考:本とは長40ヤール幅1ヤール物1巻(20枚)、価格の円未満は四捨五入。

『福岡県の蘭業誌』表9-64を転載、一部改変。

恐慌の影響を受けたものであろう。その影響の大きさは「須古村莞蕨製造組合」が大正9・10年には事業中止、同9・10年の郡内四十ヤード物(輸出向け莞蕨)の生産が0となり、その他の蕨産生産も同9年には前年比の25%にまで落ち込んでいることから窺える(表9)。大正9年にも前年比93%の生産をあげた武内村も同10年以降、武雄町も同9年以降それぞれ0となっていることからすれば、武内村・武雄町[®]の莞蕨製作は大正9年の大恐慌を契機に中止されたものと思われる。

県内の状況を見ると、『佐賀県統計書』では大正4年(1915)に「輸出向け莞蕨」が「四十ヤード物」と変更になっているが、同2年をピークに同4年からは減少するものの、(表4)、四十ヤード物の生産は杵島郡が主体であったと思われる。それが上記のように、大正9・10年には0となっている。その代わり、大正8年に生産数量を大幅に延ばした佐賀郡生産の国内向けと思われる蕨枕用蕨産が、単価は安かったにせよ、同9・10年の

表 8 杵島郡内莞莖価格一覧

(単位：円)

	須古村	橋下村	橘村	武雄町	武内村	合計
大正5年	11,663	1,323	240	179	0	13,405
大正6年	22,621	1,482	115	5	900	25,123
大正7年	45,892	1,750	330	13	3,150	51,135
大正8年	61,140	4,368	725	240	3,600	70,073
大正9年	12,430	2,860	980	0	3,360	19,630
大正10年	12,400	2,593	553	0	0	15,546
大正11年	11,768	1,170	555	0	0	13,493
大正12年	11,800	1,318	400	0	0	13,518
大正13年	11,875	2,545	270	0	0	14,690

各年の12月末日の集計である。

表 9 杵島郡内真産及び莞莖（花莖）価格一覧

	真産及莞莖（花莖）				価格 合計
	四十ヤード物		その他		
	数量(本)	価格(円)	数量(本)	価格(円)	
大正4年	575	2,760	69,500	10,425	13,185
大正5年	616	3,080	52,570	9,463	12,543
大正6年	274	3,275	90,228	20,948	24,223
大正7年	266	3,532	214,750	44,453	47,985
大正8年	230	4,240	203,660	62,233	66,473
大正9年	0	0	51,500	16,270	16,270
大正10年	0	0	32,150	15,548	15,548

大正5年以降は「真産及莞莖」は「真産及花莖」と変更されている。

県内における真産生産数量の主流を占め、杵島郡ではその他の真産の生産が減少してはいるものの行われている。ただこの藺枕用真産も大正11年以降は同9年比の37～42%に落ち込み、昭和5年（1930）には統計の項目から消えている。

四十ヤード物に関しては、大正11年（1922）以降生産が再開されたようであるが、数量は同8年比の13%以下と零落振りが著しい。その生産地については、大正11年から昭和3年までの郡別詳細が不明であるが、昭和4・5年の統計を見ると佐賀郡ではなかったかと想像される。昭和5年に杵島郡での生産も再開され、同7年の詳細は不明であるが、同7年以降から県内の「真産及び花莖」の生産は杵島郡のみとなった。おそらく杵島郡須古村の「須古村莞莖製造組合」がその中心を占めていたのであろう。

6. 須古村莞莖製造組合の解散

須古村莞莖製造組合の昭和初期以降の動向については、資料が残されておらず、不明な点が多い。戦前に組合に勤務されていた川津の赤坂吉麿氏（大東亜戦争に出征）のお話では、組合の職員は組合長の他に赤坂氏と女性1人のみで、花ござと蓑裏を取り扱っていた。専門の織機を使用する専門の織り手もいたが、大半は各家庭で織られた花ござ

を集めて、主に県内に販売していたようで、国外には輸出していなかった。組合でも染色していたが、染め粉は柳川方面から購入していた。

第二次世界大戦終了後も何年かは組合は存続した模様であるが、何時解散したのかは資料等もなく不明である。ただ、組合の活動状況は戦前とほとんど変わることがなかったのではないかと想像される。いずれにせよ、大正・昭和初期と県内の花ござ生産の一翼を担い、国外にも輸出されていた須古の花ござは、昭和10年代後半以降には国外輸出も停止され、事業としては県内を主とする内容に変化したことは間違いないものと考えられる。

7. 藺草栽培の現況

これからの記述は、白石町役場産業課で技術指導員として藺草栽培振興に勤められた竹下忠義氏（現、白石町収入役）からお伺いした内容を中心にまとめたものである。

昭和40年（1965）当時、僅か53戸で7haしか栽培されていなかった藺草が、米の減反政策の一環として注目を集め、その結果、昭和40年頃に白石町藺草組合が結成された。

昭和48年（1973）には287戸、62.5haまで拡大されたが、1戸当り作付面積は少なく定着性に乏しかった。しかしながら、昭和49（1974）年頃に国の補助金を得て、畳表の自動織機を購入したため、1戸当り作付面積は約2倍に上昇した。それ以前に自動織機を所有していたのは、川津地区の3軒のみであった。購入した自動織機は町内の川津・湯崎・甘治新村各地区に設置し、共同で畳表のみを生産していた。

1回か2回福岡県（筑後方面）から講師を招いて、花ござ用の染色講習会を開催した。当時既に花ござを織る人は5～6人程度しかいなかった。

組合の活動を継続しながら、昭和50年（1975）頃に当時の白石地区農業協同組合が国の補助金を得て自動織機を50台以上購入、それを各生産者に貸付るよう図った。昭和50年にはそれまで増加傾向にあった作付面積が40ha代に減少している。^②昭和52年（1977）にも同様の自動織機貸付事業を行い、作付面積は再び60ha代に回復した。生産された畳表は、主に福岡県・岡山県の畳表の業者（問屋）が買い付けに来ていた。

昭和53年（1978）5月に事業を白石地区農業協同組合に移管し、い業部会が発足、現在に至っている。しかしながら、昭和55年（1980）には作付面積は60haを切り、以下減少傾向が続いている。栽培者数も昭和47年をピークに毎年減少し、同52年に僅かに増加したものの、それ以降も減少傾向は続いている。

<註>

- ①イラクのアル・タール洞窟から、紀元後1～3世紀のイグサ科イグサ属の植物を畳表風に織った縁飾り付きのムシロが出土している。（松崎哲「イラク アル・タール洞窟出土のムシロ」『備後表－畳の歴史を探る－』広島県立歴史博物館友の会 1990年）
- ②伊藤実氏は「たたみの起源を探る－ムシロの考古学－」（『備後表－畳の歴史を探る－』広島県立歴史博物館友の会 1990年）のなかで、杉山寿栄男氏の『日本原始繊維工芸史』に紹介されているゴザと同じ編み方のムシロ圧痕を持つ土器が現在は行方不明で、縄文土器か弥生土器かも不明であるとするが、縄文時代の可能性としては残しておくべきであろうとされている。
- ③鈴木三男「樹木から見た三内丸山遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No.419

ニュー・サイエンス社 1997年

名城秀一・鈴木三男「第6節 三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土木材の樹種」

『三内丸山遺跡Ⅺ-第6鉄塔地区調査報告書2-』青森県教育委員会 1998年

- ④橋口達也「甕棺内人骨等に附着せる布、蓆」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』 1980年
(『弥生文化論 稲作の開始と首長権の展開』雄山閣 1999年に再録)
- ⑤伊藤実「たたみの起源を探る—ムシロの考古学—」
(『備後表—畳の歴史を探る—』広島県立歴史博物館友の会 1990年)
- ⑥小林行雄「II 編物 二 簀席編織」『続古代の技術』塙書房 1980年
『金蔵山古墳』復刻版 木耳社 1989年
- ⑦『東京国立博物館収蔵品目録(考古 土俗 法隆寺献納宝物)』東京国立博物館編 1956年
『昭和大修理完成記念 法隆寺展 昭和資材帳への道』図録 小学館 1985年
『国宝・重要文化財大全』6 工芸品(下巻) 毎日新聞社 1999年
- ⑧木村法光『正倉院の調度』日本の美術 No.294 至文堂 1990年
- ⑨大宝・養老令制では朝廷諸行事の設営を担当する大蔵省掃部司かにもりのつかさと宮中諸行事の設営を担当する宮内省内掃部司うちのかにもりのつかさとがあった。掃部司の職掌は「正一人。掌。薦席牀簀苦。及鋪設。洒掃。蒲藁葦簾等事。」、内掃部司の職掌は「正一人。掌。供御牀狹畳席薦簀簾苦鋪設。及蒲藁葦簾等事。」である。このように職掌内容の重複する部分が多いため、弘仁11年(820)閏正月5日の格で両司が統合され宮内省掃部寮となった。
- ⑩ ⑤と同じ
- ⑪小林行雄「II 編物 二 簀席編織」『続古代の技術』塙書房 1980年
- ⑫ ⑤と同じ
- ⑬須古鍋島家は初代邑主が龍造寺隆信の弟信周で、2代目信明が須古姓を、3代目茂周から鍋島姓となり、以後15代で明治維新を迎えた。
- ⑭吉岡達太郎氏は大正2年(1913)1月18日に須古村長に初当選、以後昭和4年(1929)1月21日の任期満了まで4期16年勤めた後、12年間かけて『須古村片影』をまとめた。「第壹篇 歴史的観念」の項に「鍋島侯爵邸ノ蔵書ヲ抜粋シ或ハ先輩ノ口吡(口碑か)ト従来ノ記憶トヲ斟酌シテ漸ク本編ヲ緝集」したとある。
- ⑮「川津縫之助」なる人物については手掛かりは全くない。ただ、龍造寺隆信と高城城主平井経治との間の攻防戦の記述(『直茂公譜』『直茂公譜考補』)の中に、平井氏側の武将として「河津近江(守)」の名が語られている。このことから推測すれば、川津(河津)氏は川津地区を本拠地とする在地の有力武将であったと考えられる。旧須古邑(川津地区含む)内所在の石造物(墓碑以外)を調査しているが、現在のところ「川津縫之助」や「川津」姓の人物は未だ確認できていない。
- ⑯『龍造寺御系圖』(佐賀県立図書館郷土資料室、コピー)には「信昭 須古下総守 法名影菴 初松浦丹後守盛女ニ嫁雖継其家兄彦右衛門尉依早世復本姓号須古」とある。
- ⑰『龍造寺御系圖』(同上)には「信純 同彦右衛門」とある。
- ⑱『龍造寺御系圖』(同上)には「文禄二癸巳七月十日於朝鮮陣中卒 法名龍岩原宗伯居士」とある。
- ⑲『初印本 毛吹草 影印篇』加藤定彦編 ゆまに書房 1978年
- ⑳「椛島の産」『北方町史』下 北方町史編纂委員会 1987年
- ㉑多久市郷土資料館にて拝見・写真撮影させていただき、解説を白石町の古文書勉強会に依頼した。
- ㉒有田町歴史民俗資料館館長久富桃太郎氏が所有されているのを拝見・写真撮影させていただいた。なお、久留米大学産業経済研究会『産業経済研究』第30巻第1号～第31巻第1号 平成元年6月～平成2年6月に、秀村選三「近世後期の経済思想家 正司考祺『儉法富強録』(一)～(五)」として全文活字化されている。
- ㉓「七嶋表」とは七嶋藪(別名琉球藪)で織られた畳表である。七嶋藪は茎が太く三角形をしており、道具で裂いてから使用する。(『図録農民生活史事典』柏書房 1979年)
- ㉔中野禮四郎編纂『鍋島直正公傳』第五編(侯爵鍋島家編纂所 1921年)には「領内の磁器、白蠟、紙、麻其他の物産を蒐集するとともに、或は精錬局をして製作せしめらるるもの」を出展したとある。鶴田伸義編著「慶應三年巴里万国博の追想」『佛國行路記』合名會社野中烏犀園本店 1936年 蒲原 権『慶應三年/巴里万国博覧会と有田焼のこと』1967年

菊浦重雄「幕末・維新期の万国博覧会と佐賀藩 -1867年（慶応3）パリ万国博と
佐野常民との関連で-」『東洋大学経済研究所研究報告』第8号 1982年
宇治 章「幕末佐賀の海外交渉の一側面 -1867年パリ万国博について-」

『佐賀県立博物館 調査研究書』第8集 佐賀県立博物館 1982年
にパリ万博について記され、主要な品目一覧が掲載されている。須古ござの出品された可能性も否定で
きないが、今のところそれは低いと考える。巷説には幕末のパリ万国博覧会と明治初期の内国勸業博覧
会とを混同視している向きも見受けられる。

- ②⑤廃藩置県に伴い、明治4年（1871）7月14日に佐賀藩・蓮池藩・小城藩・鹿島藩・唐津藩がそれぞれ県
となり、同年9月4日に佐賀県と厳原県と合併して伊万里県となる。同年11月14日、蓮池藩・小城藩・
鹿島藩・唐津藩も伊万里県に編入される。翌5年（1872）1月に旧佐賀藩領のうちの諫早・神代・伊古・
西郷・深堀地域が長崎県に編入、同年5月29日、伊万里県のうちの肥前国田代・浜崎地方を除く旧厳原
県域が長崎県に編入される。明治9年（1876）4月18日に佐賀県は三潞県に編入されるが、同年8月21
日、三潞県は長崎県と福岡県に分割され、佐賀県域は長崎県に所属した。
明治16年（1883）5月9日に長崎県のうちの佐賀・小城・神崎・基肆・養父・三根・杵島・藤津・東松
浦・西松浦の10郡が分離して現在の佐賀県が成立した。従って、明治10・14年当時、杵島郡湯崎村は長
崎県に属していた。（『角川日本地名大辞典 41佐賀県』角川書店 1982年）
- ②⑥明治10・14年内国勸業博覧会関係の資料は県立図書館郷土資料室で拝見・写真撮影させていただいた。
- ②⑦蘇枋はマメ科の小高木で、心材の煎汁で染めると黒みを帯びた紅色になる。櫨はウルシ科の落葉小高木
で、果実からロウが取れる。
- ②⑧「士族 西五左衛門」なる人物は、明治9年（1876）4月に結成された三村（堤村・湯崎村・馬洗村）
組合会の土木係、明治19年（1886）8月から行われた馬田千丁樋管改修工事に際しては土木主任を勤め
ている。
- ②⑨堤村・湯崎村・馬洗村が明治22年（1888）に合併して須古村となる。昭和30年（1955）7月20日に須古
村と六角村が白石町（昭和11年（1936）4月1日に福治村から昇格）と合併した。
- ③⑩芦原村と大渡村が明治22年（1889）に合併し、橋下村大字芦原と大渡となり、昭和31年（1956）に大字
大渡のうち喜佐木・鳥ノ巣・岡崎・下蓑具が白石町と合併、他は北方町となった。
- ③⑪橋村・武雄町・武内村はそれぞれ現在は武雄市橋町・同武雄町・同武内町となっている。
- ③⑫『白石町農業の概要』佐賀県杵島郡白石町 1983年 作付面積と栽培者数も同書から引用。

IV. ま と め

栗山ユキさんからの聞き取りを中心として花ござについて述べたが、その結果、「須古の
花ござ」と呼ばれ長い伝統に培われてきたと言われているのが、現在見られるよう
な各種の色彩豊かな花ござとなったのは、大正2年（1913）の須古村莞莖製造組合結成
以後であることが判明した。それ以前の花ござは、植物染料を使用した赤と黒の2色で
あった。恐らく花ござとして成立した時点から2色のみの素朴なものであったろう。た
だ、明治10・14年（1877・1881）の内国勸業博覧会に当時の湯崎村から出品されている
ように、地域を代表的する産物であったことは間違いないであろう。

花ござの製作開始時期については、江戸時代の『毛吹草』に肥前国の特産物として「繪
筵」とあることから、詳しい生産地は不明だが17世紀前半には製作されていたことは推
定される。『佐賀縣統計書』にみられるように、明治後期に佐賀市・佐賀郡で輸出向け莞
莖が製造されていることからすれば、その地域で明治以前に製造されていたと考えるこ
ともできる。白石町内における花ござを含めて藺草の栽培については、地元の伝承を検

討してみたが、龍造寺信周が文禄の役の際に朝鮮から蘭草を移植したという内容は、種々疑問があり検討の余地がある。既に述べたように、福岡県内で弥生時代中期の甕棺から蘭草製と考えられる蓆片が出土している事実、また奈良時代以降諸国（肥前国も含む）から貢進された産物に、蘭草製と考えられる蓆等がみられる事実から、蘭草栽培の起源が弥生時代にも遡る可能性がある。このことから、白石町における蘭草の栽培も龍造寺信周に関連して語るのではなく、それ以前から行われていたと考えることが妥当であろう。ただ、現在のところ具体的な時期は明確にはしえない。

江戸時代における須古邑の蓆を語る確実な史料は、多久邑の『御勝手方日記』文化8年（1811）の記述である。当時既に須古邑湯崎村が蓆製作の中心となっており、その為に「御領中産惣元請」が鐘ヶ江甚助に許され、その影響力の強さに「須古同様」に蘭草を植え蓆を製作していた椀嶋村が難渋していた。元文4年（1739）の椀嶋村田帳に「蘭田」があることから、須古邑でも同時期の18世紀前半には蘭草が栽培されていたのではないかと推定した。これが現在のところ、須古邑における蘭草栽培・蓆製作を証明する確実な史料である。

明治後期以降の蘭草製品（蓆・莞蓆）については、『佐賀縣統計書』『杵島郡統計書』をもとに述べてきた。明治後期から大正前半の蓆等の製作は、杵島郡のみならず佐賀市、佐賀・神埼・三養基・小城・藤津各郡でも行われていた。特に輸出向け莞蓆（花蓆）については佐賀市・佐賀郡が主流であり、杵島郡での製作は大正元年（1912）以降であり、翌2年以降は杵島郡が主流となっていく。大正8年（1919）の恐慌の影響を受けたものの、昭和6年（1931）から杵島郡のみが40ヤード物（輸出向け莞蓆）の生産を行っている。このことは、大正8年に椀嶋村莞蓆製造組合の結成もあるが、同2年（1913）の須古村莞蓆製造組合の成立が大きな要因であろうことを述べた。

しかしながら、昭和10年代から20年代には組合も事業を縮小され、終には解散の事態に至った。現在では、須古の花ごぎはごく一部の人のみが趣味として織り続けられて立状況であり、当時の盛況を窺わせるものは何もない。ただ、多くの人々を魅了したであろう各種の色を使用した紋様の美しさは現在にまで受け継がれているが、今後も伝承されていく可能性が極めて低いことは遺憾に堪えない。

<参考史料・資料>

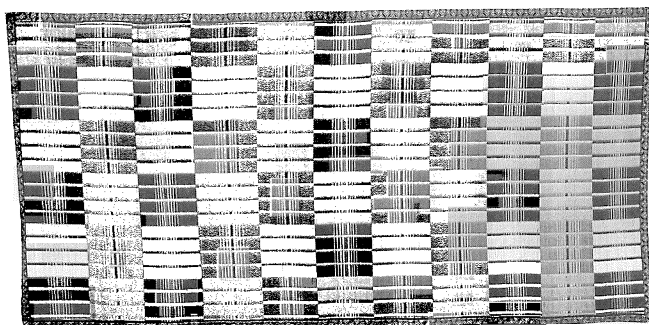
- 『萬葉集』一～四 日本古典文学大系 4～7 岩波書店 1957・1959・1960・1962年
『古事記』日本思想大系 1 岩波書店 1982年
『日本書紀』上 日本古典文学大系67 岩波書店 1981年
『續日本紀』後篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 1982年
『續日本紀』四 新日本古典文学大系 岩波書店 1995年
『律令』日本思想大系 3 岩波書店 1982年
『寧樂遺文』中・下巻 竹内理三編 東京堂出版 1968・1969年
『延喜式』中・後篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 1987・1988年
『類聚三代格』前篇 新訂増補国史大系 吉川弘文館 1977年
『諸本集成 倭名類聚抄』本文篇 京都大学文学部国語学国文学研究室編 臨川書店 1999年
『歴代鎮西志』青潮社 1992年
『龍造寺御系圖』（コピー版）佐賀県立図書館
『直茂公譜』『直茂公譜考補』佐賀県近世史料第一篇第一巻 佐賀県立図書館 1993年
『初印本 毛吹草 影印篇』加藤定彦編 ゆまに書房 1978年
『和漢三才圖會』東京美術 1999年
『丹邱邑誌』文献出版 1993年
『文化七庚午九月ヨリ 御勝手方日記』1811年（多久市郷土資料館所蔵）
『儉法富強録』巻之二 幣金論 天保3年（1832）（久富桃太郎氏所有）
『古事類苑』植物部・金石部一 古事類苑刊行会 1932年
『古事類苑』器用部二 古事類苑刊行会 1934年
『明治十年内國博覧會自費出品目録』長崎縣勸業課（佐賀県立図書館所蔵）
『明治十年第一回内國博覧會出品目録并解説書褒状寫』長崎縣勸業課（佐賀県立図書館所蔵）
『明治十四年第二回内國博覧會出品願并出品解説書』長崎縣勸業課（佐賀県立図書館所蔵）
『明治十四年第二回内國博覧會出品目録并褒状寫』長崎縣勸業課（佐賀県立図書館所蔵）
『杵島郡統計書』佐賀縣杵島郡役所 自大正四年至大正六年（合本）
『杵島郡統計書』佐賀縣杵島郡役所 自大正七年至大正十年（合本）
『杵島郡統計書』佐賀縣杵島郡役所 自大正十一年至大正十三年（合本）
『佐賀縣統計書』第三篇（勸業）佐賀縣 明治三十九年～大正四・八年版（コピー版）
『佐賀縣統計書』第三篇（産業）佐賀縣 大正十年・昭和四～六年・昭和八年～十一年版（コピー版）
『佐賀縣統計書』昭和二十七年版 佐賀縣総務部統計課 1952年

<参考文献>

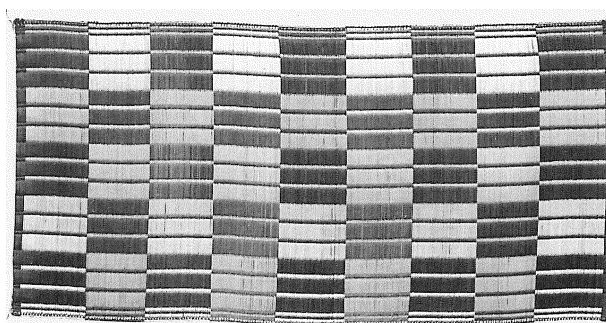
- 『白石町史』白石町史編纂委員会編 1974年
吉岡達太郎『須古村片影』1980年
小林行雄『続古代の技術』塙書房 1980年
『備後表一壘の歴史を探る一』図録 広島県立歴史博物館友の会 1990年
『福岡県の蘭業誌』福岡県い業振興会編 1996年



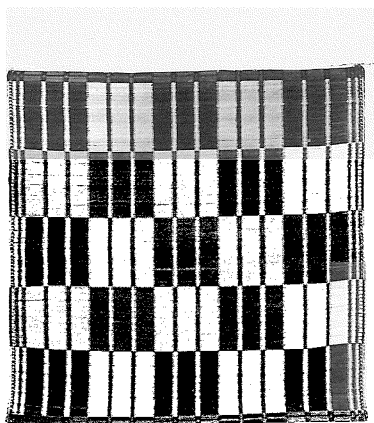
1



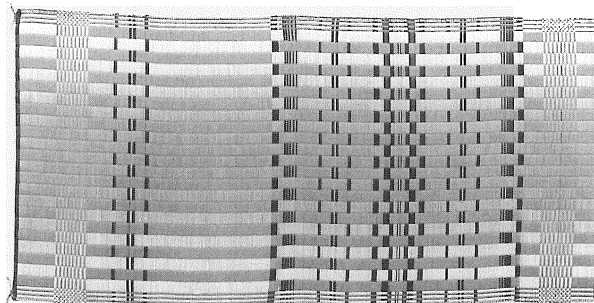
2



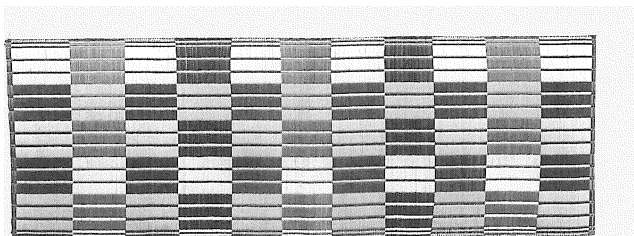
4



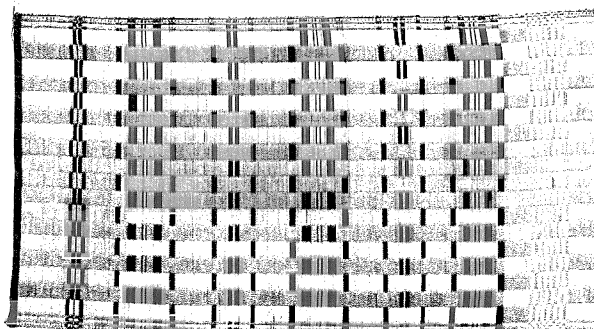
3



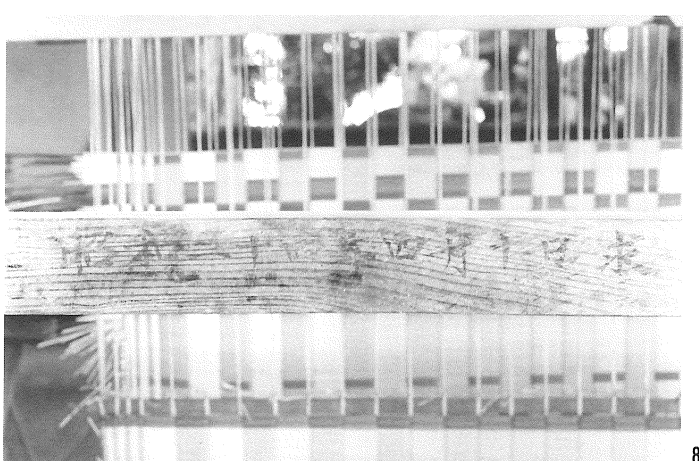
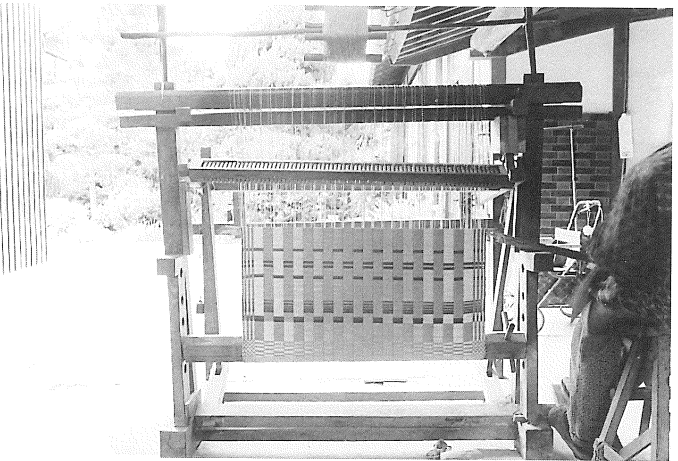
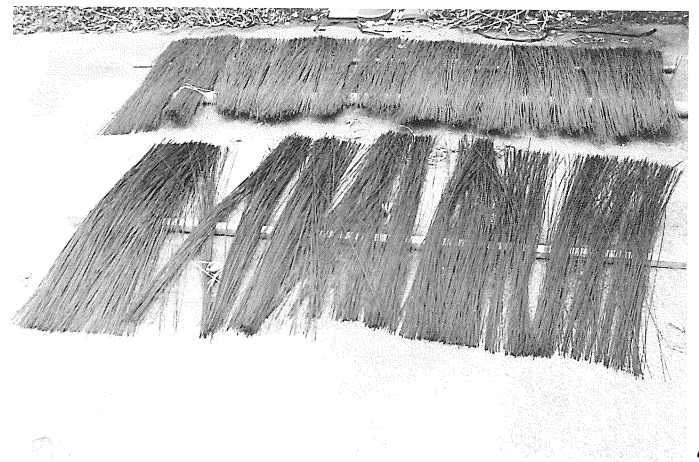
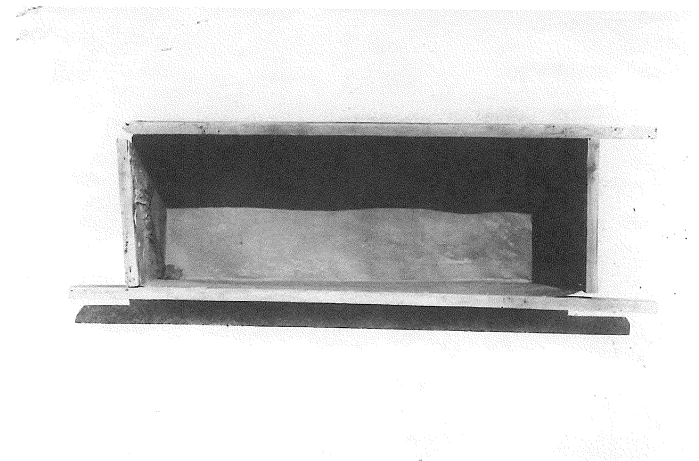
6

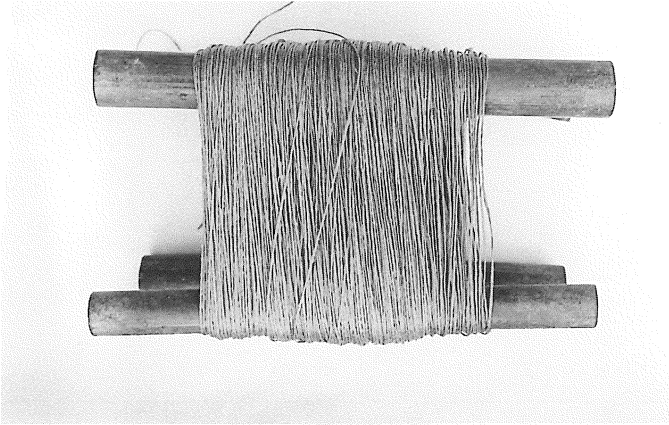


5

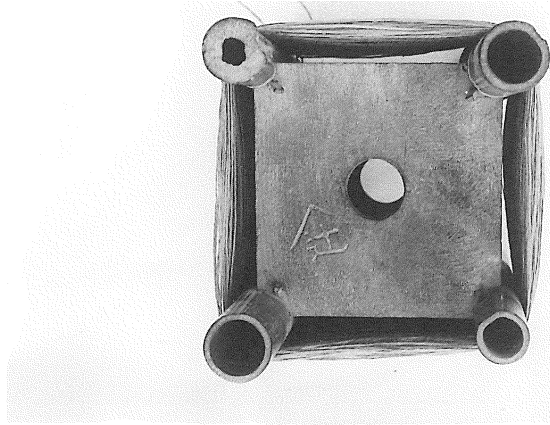


7

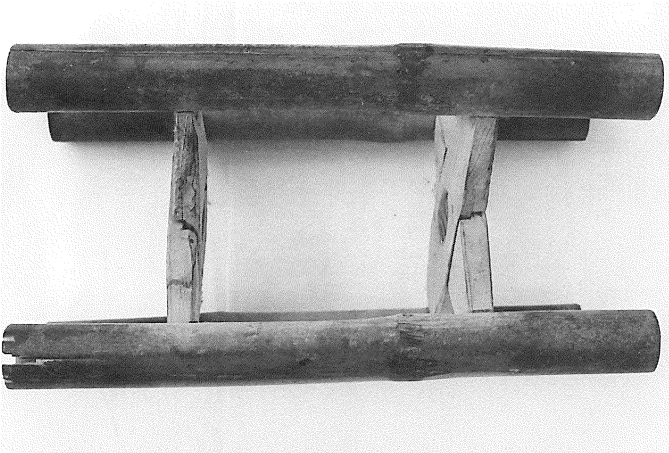




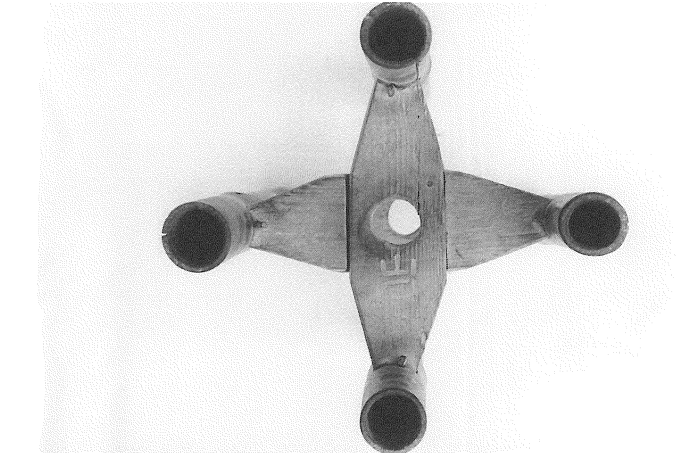
1



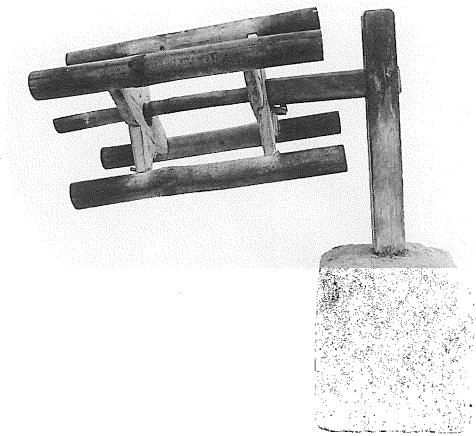
2



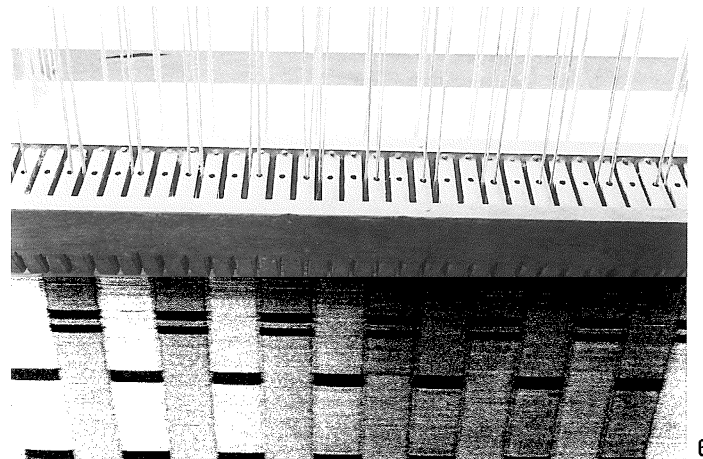
3



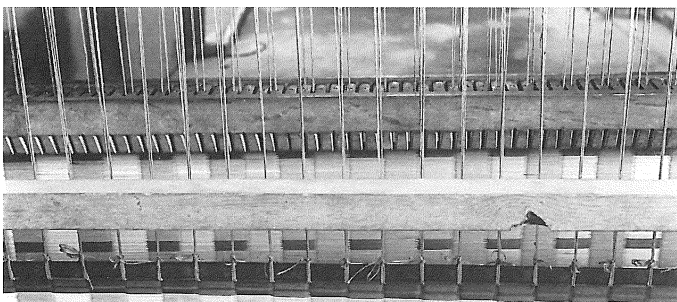
4



5



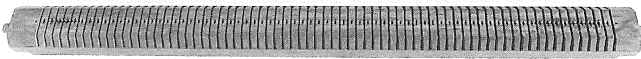
6



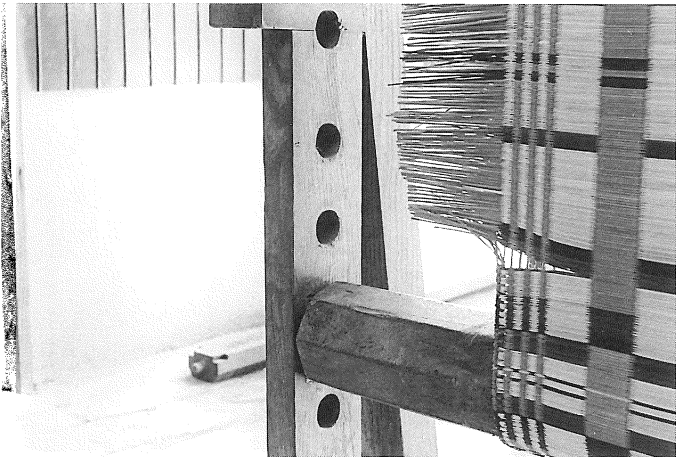
7



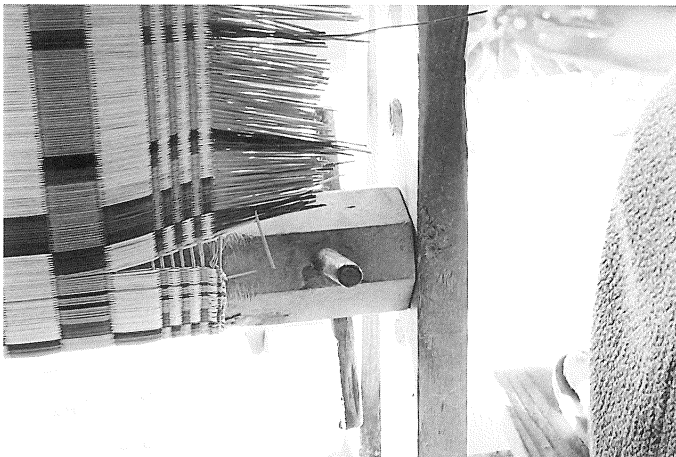
1



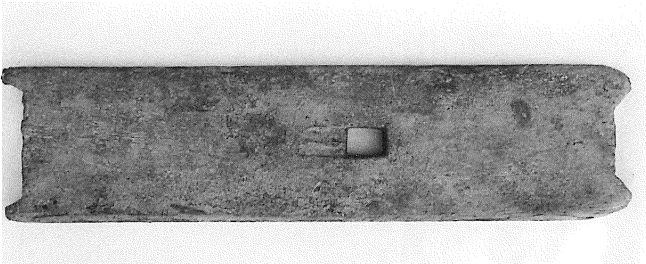
2



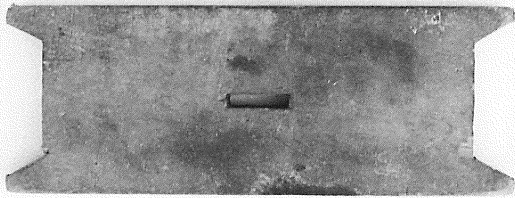
3



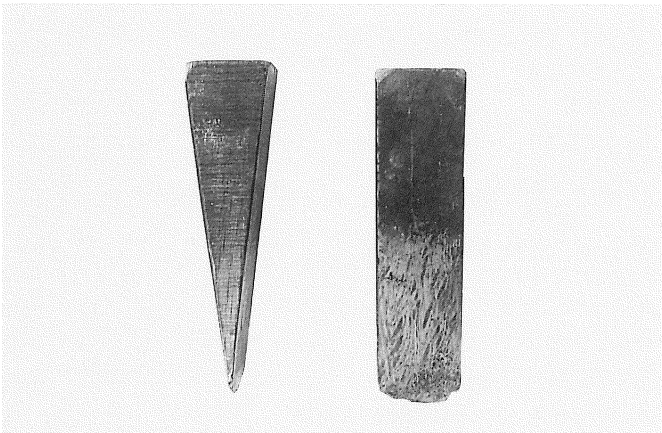
4



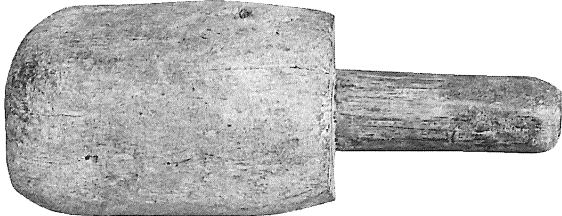
5



6



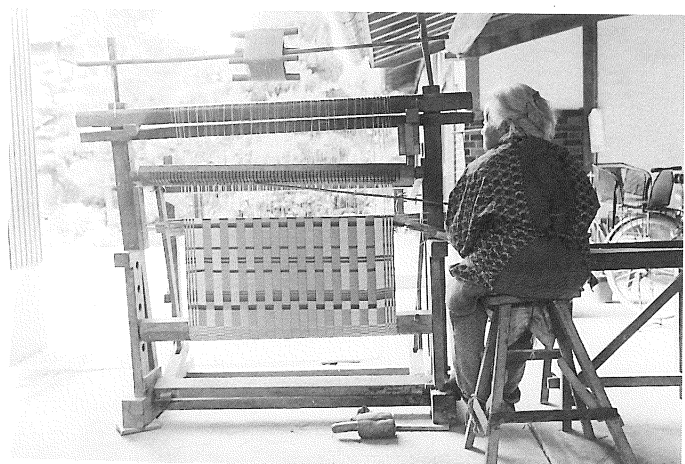
7



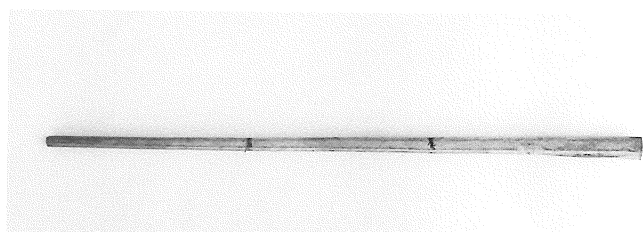
8



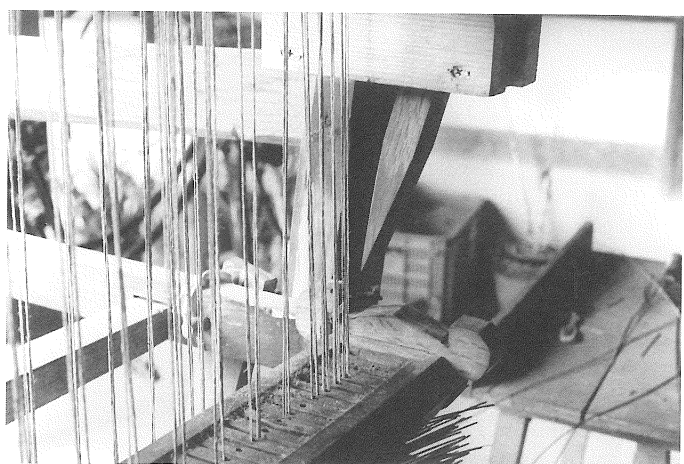
1



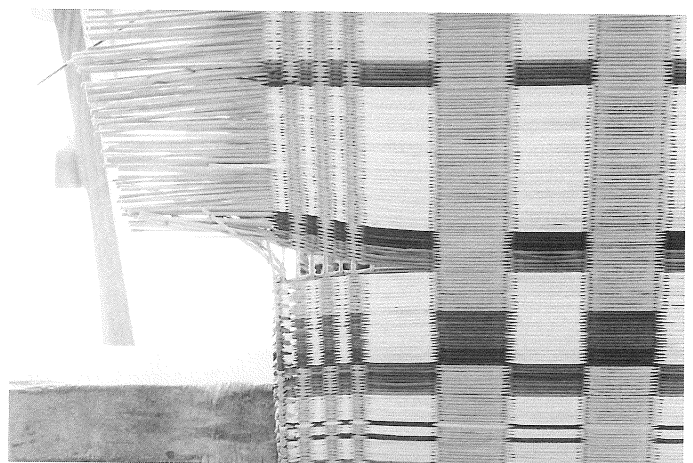
2



5



4



6



7



8

文化七庚午九月ヨリ
御勝手方日記
 西 福地重雨
 藤崎海兵衛

一 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...

一 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...

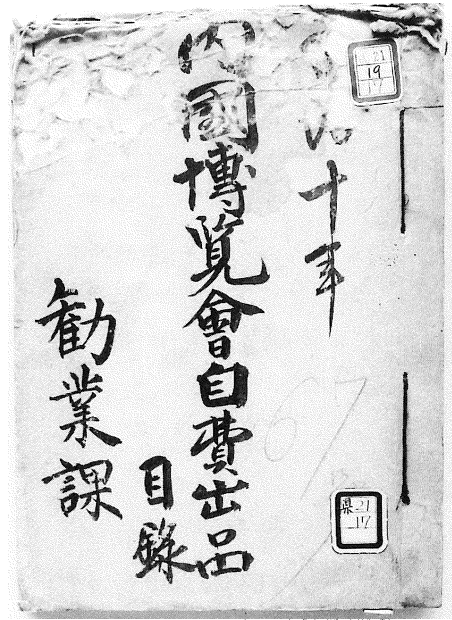
一 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...

一 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...

一 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...
 福地村の...
 少の御様...

品名	数量	単位	備考
一 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
二 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
三 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
四 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
五 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
六 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
七 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
八 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
九 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
十 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村

4



1

物産
名産
地方
花産
出所
長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
川津、各戸ニテ製造ス
素蓆
前同所、各町ニ裁信スル蓆
製造用品
赤色、蘇防黑色、唐糖、葉白色、蘭、素
製造法
蓆機ニ荒苧、糸ヲ講節トシ織テ織ハト等ニ

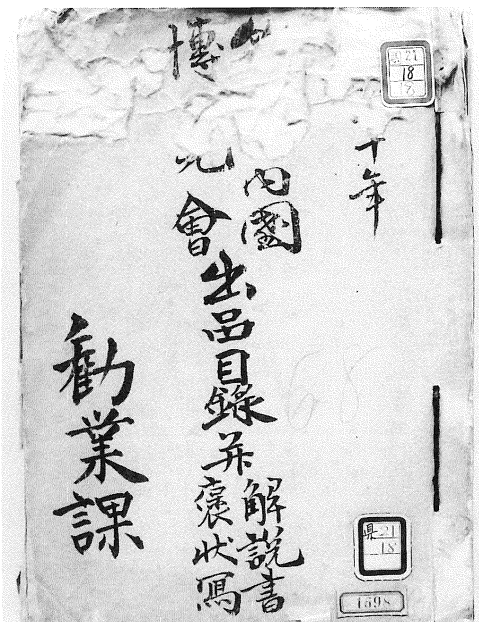
5-1

品名	数量	単位	備考
一 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
二 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
三 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
四 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
五 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
六 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
七 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
八 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
九 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村
十 蓆	全	枚	長崎縣下肥前國杵島郡湯井村

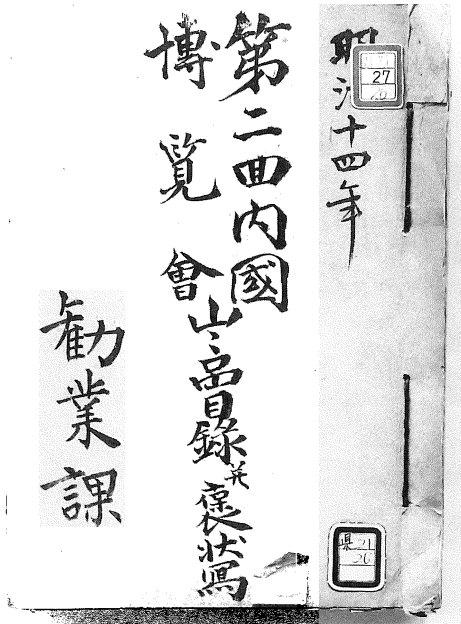
2

開業沿革年曆及人名
往年より、博業ニ開業共他不詳
製造機具
竹木ヲ以テ機ヲ造ル
産出種類
巾六尺長一丈五尺、全三尺長十全故蓆
初用
夏時、居里或ハ四季、寝蓆ニ要ス
代價高總計
一、二年壹萬九千七百八十枚
一、二年九千四百六圓五拾錢

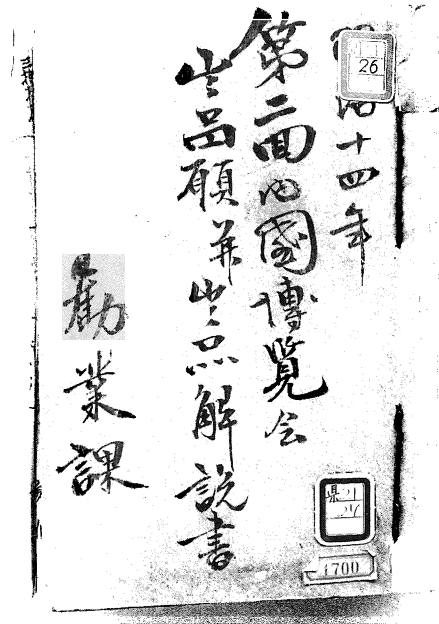
5-2



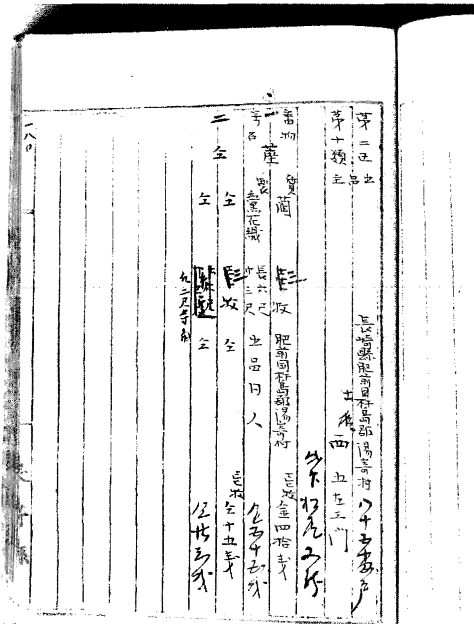
3



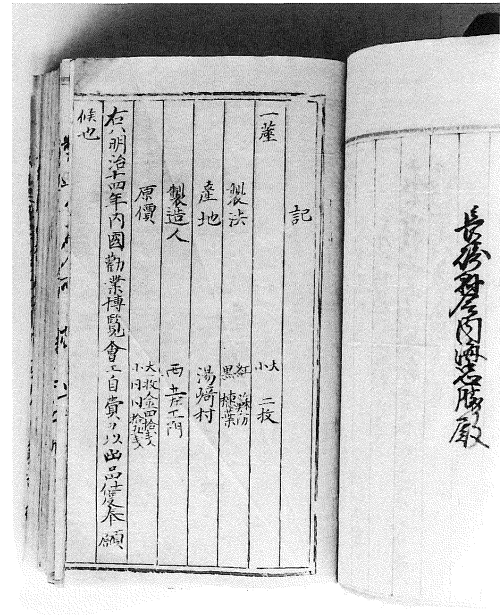
3



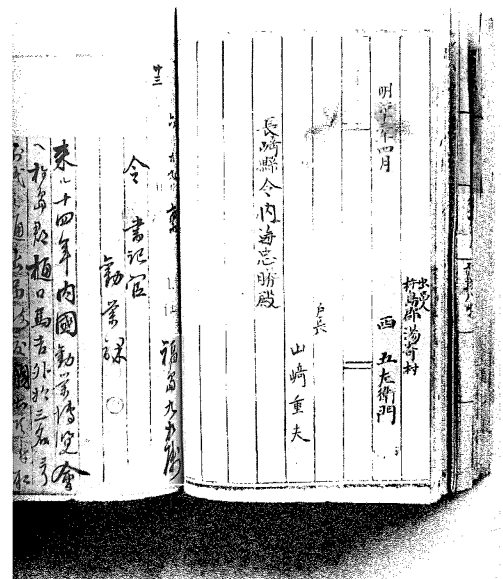
1



4



2-1



2-2

白石町民俗文化財調査報告書第1集

須古の花ごど

平成12(2000)年3月31日

発行 佐賀県白石町教育委員会
佐賀県杵島郡白石町大字福田1809番地1

印刷 (株)昭和堂印刷
佐賀市高木瀬西4丁目12-1

